

塩町三百年

和合組百三十年

塩町和合組

八戸市消防団第三分団三班

塩町山車組

塩町えんぶり組

塩町三百年 和合組百三十年

塩町和合組

- ◆八戸市消防団第三分団三班
- ◆塩町山車組
- ◆塩町えんぶり組

もくじ

代表挨拶・祝辞	3
塩町和合組	
第一部 八戸市消防団第三分団三班	11
第二部 塩町山車組	27
第三部 塩町えんぶり組	63
資料編	117
編集後記	162
題字 正部家種康 カット 戸田清一	158

挨拶

塩町和合組代表 茄田重一郎



挨拶

塩町和合組は、明治以来の長い歴史を持つています。

その始めあたりの事を知っている人といえば、もう誰もいません。

また、その長い歴史の中には、実に様々な事がありましたでしょう。それらを全部知っているという人もまたいないでしょう。

今ここに、それらの記録を拾い集め、わたしたちの祖父やおやじや兄弟達のなしあげた仕事の数々を調べ上げ並べて、みんなが忘れないように、そしてこれらの若者達へと伝えていこうという気持ちが、ひとつの本となりました。

塩町和合組は、常にこの八戸という町の発展に、その員として、地域の皆様と共に努力してまいりました。八戸市消防団第三分団三班として、塩町山車組として、そして塩町えんぶり組として。そして、それぞれがまた長い歴史と伝統を築き上げて来ております。

今ここにそれを一望しますと、先輩達は、實にたいした仕事をやりとげて來たものだと、感心せずにほれません。しかもこれは、決して終わりが来ない仕事であります。今、現在、なお引き続きやっている私達へ、これはまさしく叱咤激励となりますでしょう。また、私達に続く若い人達への、手本ともみちびきともなるであろうと期待し祈念する所であります。

祝

辞

八戸市長 小林眞



この度、塩町に消防団の前身となる消防組織が設立されてから百三十年という節目の年を迎えることは誠に喜ばしく、和合組をはじめ関係者の皆様に対しまして、心よりお祝い申し上げます。

塩町和合組は、八戸消防団第三分団三班として、地域の消防活動に積極的に取り組んでおられるほか、八戸三社大祭のお祭り組、八戸えんぶりの塩町えんぶり組の活動にも深くかかわりを持ち続け、市内でも卓越した山車製作者を輩出するなど、地域のコミュニティ活動に積極的に取り組んでおられます。

明治七年に「和合組」の前身となる消防組「舎組」として設立されて以来、百三十年の長きに亘り、活発な地域活動を支えてこられたのは、歴代分団長をはじめ団員の皆様、さらには住民の皆様のたゆまざるご努力の賜物と、深く敬意を表する次第であります。

さて、近年、少子高齢化や核家族化、生活様式の多様化などが進展する中、町内会や近所づきあいといった地域のつながりが希薄になりつつあり、子どもや高齢者の安全確保など、身近な暮らしの安全・安心の確保に対する不安が高まっています。

このような中、地域の様々な課題解決のため、行政と連携して取組みを進める町内会や消防団をはじめとする地域コミュニティの役割が見直されており、改めて、住民の結びつきによる地域の力に、大きな期待が寄せられております。

今後は、塩町和合組をはじめとする地域コミュニティの担うべき役割は、より重要なものと考えております。

塩町和合組におかれましては、すでに各種コミュニティ活動が活発に展開されていますが、今後とも地域の安全・安心の確立と福祉向上のため各種活動を継続されますとともに、市勢発展のため、なお層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

百三十周年を機に、塩町和合組の今後ますますのご発展と、団員をはじめ地域の皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉いたします。

刊行を祝して

八戸市八戸消防団長 藤田正次郎



この度、「塩町和合組」が刊行されるにあたり、心よりお祝いを申し上げます。

八戸市塩町消防団は、先人の歩んだ幾多の苦難と輝かしい発展の時代経過をたどって現在に至つており、ここに記念誌が刊行されることは、八戸市塩町消防団の歴史と実績を後世に残す良い機会であり、大変喜ばしく、これまで携わってこられた関係者各位のご労苦に深甚なる敬意を表するものであります。

本誌は、八戸市塩町という町の由来から始まり、明治時代になって藩政時代の町火消しの精神を受け継ぎ「和合組」が誕生、又、明治一十七年には、法律が改正され「八戸町消防組第三部第三班」となり警察の管理下となるなど、更に初代組頭の浅水礼次郎氏と一代目組頭北村益氏の就任した時の秘話や、北村益氏がこれまでの消防の悪習を改めさせ、現在の消防団の基礎となる消防組改革に着手するなど、その諸先達の活動された当時の様子や火消し道具、貴重な写真等々が記るされ、今後の消防団活動に大いに参考となるものであり、その当時の、ご労苦が伝わってくるようであります。消防に携わるものとして、「和合組」の歴史と伝統そして消防精神を引き継ぎ、地域住民の安全、安心のため、多種多様化そして大型化している災害に対応できるよう専門知識・技術の習得・訓練に励み、住民の負託に応えるよう努力しなければならない、という思いをさらに強くしております。

どうか第三分団三班の皆様には、記念誌の発刊を契機に、さらに決意を新たにし、消防の使命達成ため、今後も活躍されることを希望いたします。

結びに、団員の皆様には、健康第一、安全を最優先に活動されることと共に、関係者各位のご健勝と、ご多幸を祈念申し上げ、お祝いのことばと致します。

祝
辞祝
辞

八戸市消防団第三分団 分団長 類家 隆好

八戸市消防団第三分団の各組は、明治の昔からそれぞれ、龍組、三番組、和合組というなつかしい名を持つ長い伝統を誇る組織であります。

第三分団の班、二班、三班となつているこれらの組は、いつも助け合い、ある時はライバル意識を燃やして、互いに切磋琢磨して今日に至つております。和合組に纏振りが居なかつた第二次世界大戦中には、龍組から人が来て、和合組の纏を振つてくれていたと聞いております。

この度、私の出身組であります第三分団三班、塩町和合組より、その消防団として、また八戸三社大祭の山車組、およびえんぶり組としての活動報告ともいうべき本が出されると聞き、そういうイベントはすでにあちこちの町内に行われてあるのを存じておりましたが、遂にわが組にも湧き上がつたかと、喜びをかみしめております。

私自身、この和合組に育てられ活動して来て、その様々な面を見てまいりました。長い歴史の中では、ほんの少しの場面だけではありますが、それでもいろいろなことがあったといわばにはおれません。私たちの時代から考え方は多様になり、消防団や町内会には関心が無いという人々も増えて來たのでした。そういう中でありますながらも、和合組は絶えることなく、今日なお健在であるという現実を見る時、長い間やつて来て良かつたな、と思う者は私ばかりではないと思います。

私たちの仕事を本にして歴史に残すという、このような事業が、私たちの跡を継ぐ若い連中の導きともやる気ともなつてくれれば、それ以上の喜びはありません。



「塩町和合組」の出版について

靈神社宮司 坂本栄治

最近郷土の祭、芸能を見直す傾向が、特に若い人が郷土研究と称して、神社の歴史研究に訪れて来る日が多い事は珍らしい限りである。今回は山車組について書いて欲しいとの事ですが、塩町の山車組は、消防団組織「和合組」が中心であり、出発点であったと思われる。私の記憶では塩町は古い町並で、お祭の時は軒先に葵（あおい）の造花を刺し、夕暮れ時は家紋の提灯に明かりがともされ、お祭らしい風情があった。昔の山車は、波山車が大部分で、欄山車、家山車、岩や山山車は余り無かつたと思う。塩町の山車は波山車「伝記もの」が基本で、昔の伝統を守つて製作したと思われる。山車人形の顔は歌舞伎役者の顔が大部分であつたから、とすれば歌舞伎の名場面をとりあげたのが、秀作と認められたような気がする。最近は観光客を意識してか、山車も大型化し、山車祭が主体となり、三社大祭の伝統的な神事の念が薄れ、「山車大祭」になつてゐるのは實に残念である。八戸の山車の特色の一つは、毎年新しいものが作られることであり、これは全国的に余り例が見られない。山車が年々創意と工夫をこらし、昔の面影をなくし、観客を感動させ、楽しませるようになつたのは、つには審査制である。これは悪いとは云わないが、入賞をめざす為に「せり上り」「引き出し」「開閉」等の装置により山車作りに専念した脇役があつたからだと思う。年々歳々豪華になる山車、その蔭には、言葉は悪いが、お祭バカ達によつて、伝統が保たれ、支えられて來たと思う。法靈大明神に対する報恩感謝の祭礼は、もともと秋祭であり、山車行列の笛吹きは人で、心和む音色であつたし、子供達の掛け声のヤレ、ヤレ、ヤレの言葉、休み太鼓も余り聞けなくなつたのも淋しい気がする。

思い出すまま。出版おめでとうございます。後輩の大変な資料となりますよう。



祝

辞

長者山新羅神社宮司

柳川 浩志

「塩町和合組」の御出版、お芽出度うございます。

塩町和合組の中の塩町机組の皆様には、お世話を頂いております。

明治九年に県令で禁止された机は、当時の新羅神社の関係者等が中心となり明治十四年に、再興されました。伊勢神宮に、豊作を祈る祈年祭が毎年一月十七日に斎行されて、今も続いております。

毎年一月十七日に斎行される当社の、稻荷大神の御輿渡御式は、この伊勢神宮の祈年祭に合わせて斎行されきました。此の渡御式に附祭として机を参加させ、各机組が喧騒にならぬよう監督し、神社が責任を持ちますからと申請して、復興に繋がりました。

爾来神社では伝統を保持し、渡御式には、各机組の監督責任者である頭取が人力車に乗り、各取締机組には、神社とのパイプ役として、今も昔通りに取締って頂いております。

塩町机組は、どうさいで、お三人の太夫が摺られ、お子さん達の舞子が、松の舞、田植え、えびす舞を舞われます。県外に遠征して御公演なさつたりしておいでです。和合組には山車組もあるそうで、頭が下がります。斯うした、お子様や若年者の育成や、代々の親方や年長者から、直に受け継がれてきた塩町机組にしかない伝統の芸の、次世代の人々への継承の為に、他から窺い知れぬ御苦労も有ると存じ、唯々敬服しております。

どうか皆様お体を大切にして頂いて、頑張って下さい。

毎年お御輿さんに供奉して頂いて、本当に有難く存じ、厚く御礼申し上げます。

藩政時代は、警察官の役目をしていた同心が多く住んでいた町、八戸藩の塩の蔵が存った所から塩町と呼ばれた由です。それを知る事ができるのも記録あればこそで、その意味でも、此の度の御出版は後世の人々の、良き道標となりましよう。大きな金字塔を、打ち樹てられた皆様を絶賛してやみません。



「塩町和合組」の発刊に寄せて

塩町町内会 会長

伊

東

毅

先ずもつて発刊おめでとうございます。
心よりお祝い申し上げます。

塩町で生まれ育った私として、和合組という存在はただ漠然としたものではありませんでした。町内会総会後の懇親会で和合組について、苅田重郎さんから色々とお話をさせて頂き、始めて和合組の何たるかを知つた方が多かったと思います。

お祭りの山車に関しては一人の息子や孫達は参加しましたが、私は定年になる迄は参加したことはありませんでした。山車に関して知つてている事といえば、類家久次郎さんが中心になり何連覇かしたこと、その後類家孝さん達が四連覇を成し遂げたこと位しか分かりませんでした。

机に関しては長い歴史があるということ以外殆ど知らないことだらけでした。僅かに知り得た事といえば、平成十五年に製作された八戸机に塩町の机も放映され、屯所で摺り納めをして一階で鳥帽子に向かい正座してお辞儀している姿を見て深い感動を覚えました。こうして伝統が受けつがっていくんだという事をしみじみと知らされました。

屯所については、今は懐かしい思い出があります。私の生家の斜め前方三十メートル位の所に屯所があり、その前に木造の大きなはしご状の火の見櫓があつて、その上に半鐘が釣り下げられ遠くで火事が起ると「カーン、カーン、カーン」と、近いと「ガン、ガン、ガン」と乱打されました。その鳴り方によつて寝ていても遠いか近い火事なのか分かりました。小さい頃、糠塚の方まで走つていった記憶が残っています。その屯所も国道四十五号バイパス工事のため、昭和四十三年に柏崎新町へ移転になりました。

「和合組の歩みの編集について」の計画書を机組の親方である石山登雄さんが持つて来て下さったのは平成十七年十月でした。私は断片的にしか分かつていらない和合組の歴史が冊の本にまとめられる事に非常に強い感銘を受けました。何年かかるだろうかと思っていましたが、類家章弘さん達の努力により発刊の運びとなり本当に嬉しく思います。多くの労力と時間を費した編集委員の皆さんに深く、敬意と謝意を表わします。本当にご苦労様でした。おめでとうございます。

願わくば縁あつて塩町に居を構えた方は、是非とも購入し、子供たち孫たちにまで塩町和合組の歴史を伝えつて頂きたいと強く思います。

塩 町 和 合 組



「塩町和合組」の刊行によせて

和合組顧問・郷土史家

正部家 種 康

「塩町和合組」の歴史と活動の経過を、まとめて刊行しようとの計画が、地域の若い人達から盛り上がったのは、有難く尊いことであった。それはここに住んだ先輩達の足跡をたどりながら、さらにそれを未来に発展させ継承しようとの熱意にあふれているからである。「歴史は未来の教科書である」との格言の実践にもつながる、編集委員の皆さん方の熱意に、先づ以て心から感謝と敬意をささげるものである。

そもそも塩町は、新しく誕生をした八戸藩の城下町の中で、比較的新しいにもかかわらず、町の発展に重要な役割を担当し続けてきた。その後つくられた下組町や柏崎新町と共に、経済や民生安定に大きな足跡をきざみつづけてきた。そこに住む人々の自覚や意気込みが、それを支えつづけてきたからである。

それが今までつながる和合組の誕生であり、消防団の活動、三社大祭への山車参加、机組の伝承となり、よその地域に誇ることの出来る活動として受けつがれてきた、と云うことが出来よう。和合組の伝統と団結が、それを支え、そして元老から若い者までが、協力しあって、その活動は今日もつづけられているのである。

住居標示の新しい制度で、地区町内の名称が、塩町・下組町・柏崎新町から柏崎何丁目と変更された。町内の呼称は変わったが、和合組の活動は、そのまま変わることなくつづけられている。そして時代の移り変わりと共に、町の様子は変り、農家も多かった地区の様相は大きく変化した。その変化に対応しながら、和合組は今後も、地区の人々の暮らしに役立つ役割を果たしつづけていくことであろう。

消防団活動・お祭り・机、よその地域に誇り得る足跡を、丹念にたどつた 冊が、たくさんの方の協力で刊行されることになった。改めて先輩各位の労苦を偲びながら、和合組の今後の発展を念願するものである。

塩町「和合組」

塩町和合組

—町火消し・店火消し・近代消防へ—

正部家 種康



初代藩主南部直房築城の城跡
(現三八城公園)

八戸市塩町（しおちょう）「和合組」は、地域の消防団の別名でもあり、明治時代の始め頃から、消防活動のほか、八戸三社大祭の「お祭り組」或は「塩町えんぶり組」にも深いかかりを持つづけて、現在に到っている。

和合組は、地域住民の生命財産を守る活潑な活動のほか、心を豊かにして人々の融和をはかり、青少年の教育にも貢献をしつづけてきた。

二十一世紀の新しい時代を迎え、「和合組」の活動の足跡を、たどってみることにしたい。

「塩町の名前」

塩町と云う町の名前の由来から、たどってみるとしよう。八戸の町は、藩政時代の昔（一六六五年 寛文五年）に成立した、南部八戸藩一万石の城下町であった。塩町と云う呼び名は、藩の支配する塩蔵（しおぐら）があつたからである。その場所は、現在の電報電話局のあるあたりであった。

塩は人々の暮らしにとつて、大変に貴重であり欠かせないものであった。そのため塩の生産から販売は、藩のきびしい統制下に置かれていたのである。八戸領内で消費される塩は、久慈や南浜方面の海岸で生産され、船で湊の川口に運ばれてきて、藩の塩蔵に入れられ、役人達によって保管された。

保管や警備にあたる役人のことを、同心と云つた。塩蔵がつくられ、警備の役人達の住む町と云うことで、このあたりを「柏崎の御同心町」と呼んだとの古い記録（寛文十一年、八戸藩日記）もある。

人々の重要な食品である塩蔵が配置され、その警備にあたる役人達の住む町と云うことから、「塩町」と呼ばれるようになった。

さらにまた、藩政時代には、冷害凶作や飢饉におそれることが、しばしばであった。そのため放火や盗みを働く事件の発生も、あちこちで発生した。藩では夜警の強化や、懸賞金を出しての放火事件の取りしまりにあつたが、効果はあがらなかつた。

放火による火事で、どさくさにまぎれ、食糧を盗み出す事件が、連続して発生することに備えて、藩では塩蔵の警戒を、特に厳重に行うこととした。後年塩町に設けられた町火消しは、この精神を受けつき、明治時代になつて生れる「舎組」から「和合組」の温床となつたものと考えられる。

新しい殿様がやつてきて、城下町の整備がさらに進められることになり、人々の住む町の呼び名も区別されるようになる。即ち町人町と士族町である。町人の住む町は、三日町・六日町のように町（まち）と呼ばれ、藩に仕える侍の住む所は、番町・徒士町のように町（ちょう）と呼ばれて区別をされつづけてきた。

塩町は始め柏崎の御同心町と呼ばれ、後に正徳年間の頃（一七〇〇）藩の食品保存庫である塩蔵が建てられたことから「塩町」と呼ばれたと云われる。

このあたりは、八戸の城下町の東の端にあたり、警備のための同心が配置されていた。同心とは、町の警備或は殿様の警護にあたる役人で、足輕とも呼ばれ、現在の警察官のような職務にあたっていた。よつて藩の塩蔵のあるあたりが、塩町と呼ばれたのは、そのあたりが

「藩政時代の塩町」

八戸藩が徳川幕府の指示で誕生し、現在の三八城公園が殿様の居城とされたのは、寛文五年（一六六五）のことである。初代の殿様の南部直房が、はじめて八戸に入ったのは、寛文六年の五月のことであった。その頃、八戸の城下町の原型は、寛永七年（一六三〇）盛岡南部の殿様十七代南部利直の指示で、三日町や六日町の、表通りと裏通りが形成されていたと云われる。

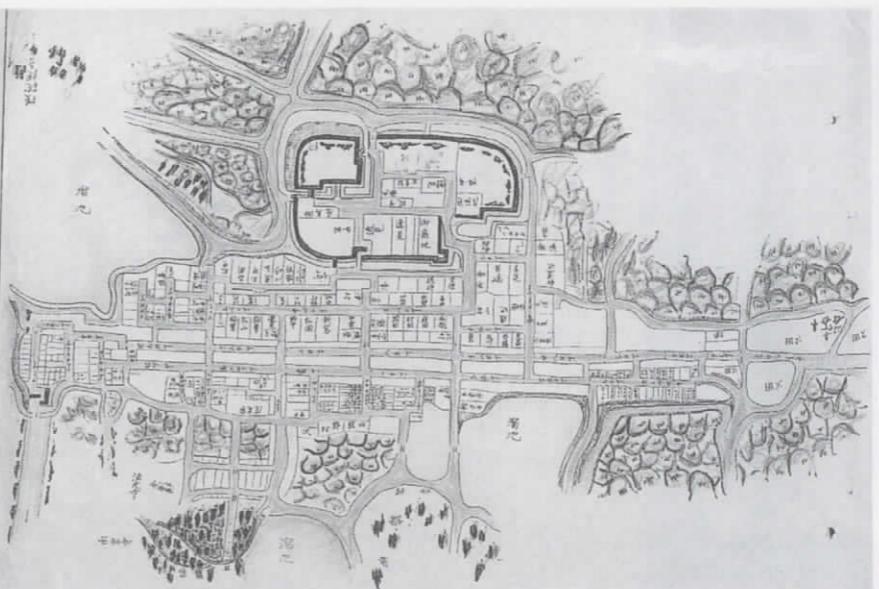
八戸藩がやつてきて、城下町の整備がさらに進められることになり、人々の住む町の呼び名も区別されるようになる。即ち町人町と士族町である。町人の住む町は、三日町・六日町のように町（まち）と呼ばれ、藩に仕える侍の住む所は、番町・徒士町のように町（ちょう）と呼ばれて区別をされつづけてきた。

塩町は始め柏崎の御同心町と呼ばれ、後に正徳年間の頃（一七〇〇）藩の食品保存庫である塩蔵が建てられたことから「塩町」と呼ばれたと云われる。

このあたりは、八戸の城下町の東の端にあたり、警備のための同心が配置されていた。同心とは、町の警備或は殿様の警護にあたる役人で、足輕とも呼ばれ、現在の警察官のような職務にあたっていた。よつて藩の塩蔵のあるあたりが、塩町と呼ばれたのは、そのあたりが

侍の住む士族町であったことを物語っている。

「火災と城下町の整備」



文化期（1804年～）の八戸市街図

八戸の城下町は、東西に細長い町であった。主要道路は、三日町や八日町の表通りと、六日町・朔日町の裏通りの二本だけであった。表通りは、東に延びて、小中野から白銀・鮫方面への湊街道の本だけで、裏通りは現在の柏崎新町で行き止りになっていた。ちなみに、裏通りが柏崎新町から小中野方面に延長されたのは、昭和の十年代になってからのことである。

そのため、西風の強い日に、城下の西の町から火事がでると、東に延びた細長い町は、大火に見舞われることがしばしばであった。藩では火災対策の一環として、さらには人口増加対策としても、町割りの新設や配置替えを行ってきた。密集している町家を移したり、新設の町への移住の指示等であった。

文化一年（八〇五）には、一十八日町の裏通りには十一日町が新設され、下大工町とも呼ばれたが、その町名は絵図に残されているだけである。

文化三年十一月には、通称「七ツ家焼け」と呼ばれる大火が発生した。一十六日町のあたりは、昔七軒の家があつた所と云うことで、新しい町名が出来ても、七ツ家と呼ばれ続けてきた。その七ツ家から発生した火事は、折からのはげしい西風におおられ、十六日町から、ヤグラ横町・六日町・岩泉町・朔日町までにひろがり、戸数一百三十三戸を焼失する大火になった。

この大火で来迎寺も類焼。このお寺は延宝年間に一回、この文政年間の「七ツ家焼け」で、三度目の火災にあつたことになる。

この大火の後で、町家の密集を分散する対策として、下組町は拡張され、文化四年には三分の二が町家、三分の一が足輕屋敷として指定された。

「塩貯蔵庫の設置」

藩政時代の始まりの頃、寛文十一年（一六七二）の一月十九日の八戸藩日記の記録に（柏崎の御同心町に火事があり、屋敷が四軒焼失…）

とある。

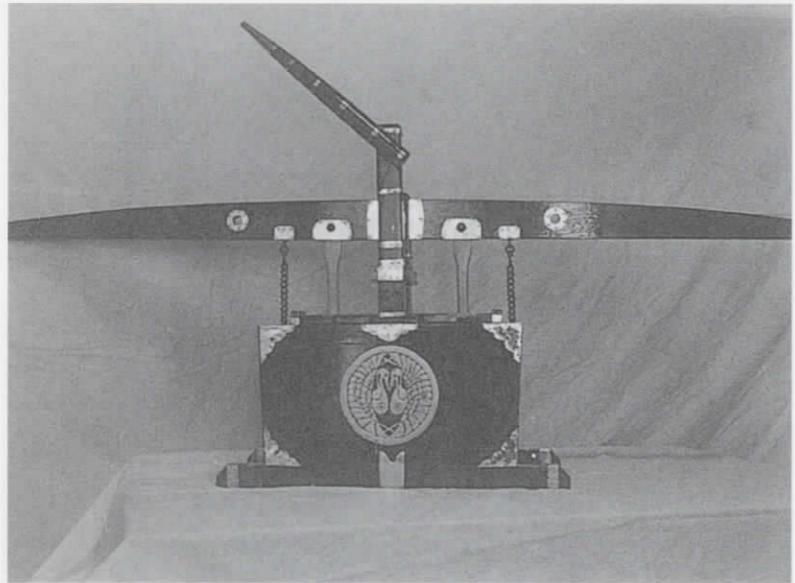
柏崎とは、柏の木の生えていた台地と云う古い地区名で、最近まで大字名として残されている。この記録は、塩町がかつては「御同心町」と呼ばれ、八戸藩に仕える警備を担当する役人の町であつたことを示している。

その後の正徳二年（一七一）には、「塩町」にて火災発生し、藩では役人に厳重な警戒の指示を行っている。その頃には、八戸藩直轄の塩の貯蔵庫が設置され、藩の重要な塩倉庫のある町と云う意味から、塩町の名称が使用されるようになったと推定される。

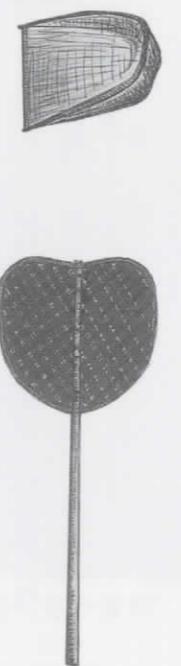
この塩倉庫の総支配人には、塩町に住む伊東仙右衛門が任命されていた。倉庫への搬入搬出を管理する役人である。幕末に至り、この塩蔵は廃止され、伊東氏は商人となり、「竹七」の屋号で、木綿呉服の店を営み、昭和の初期まで続いていた。

「町割り改正」

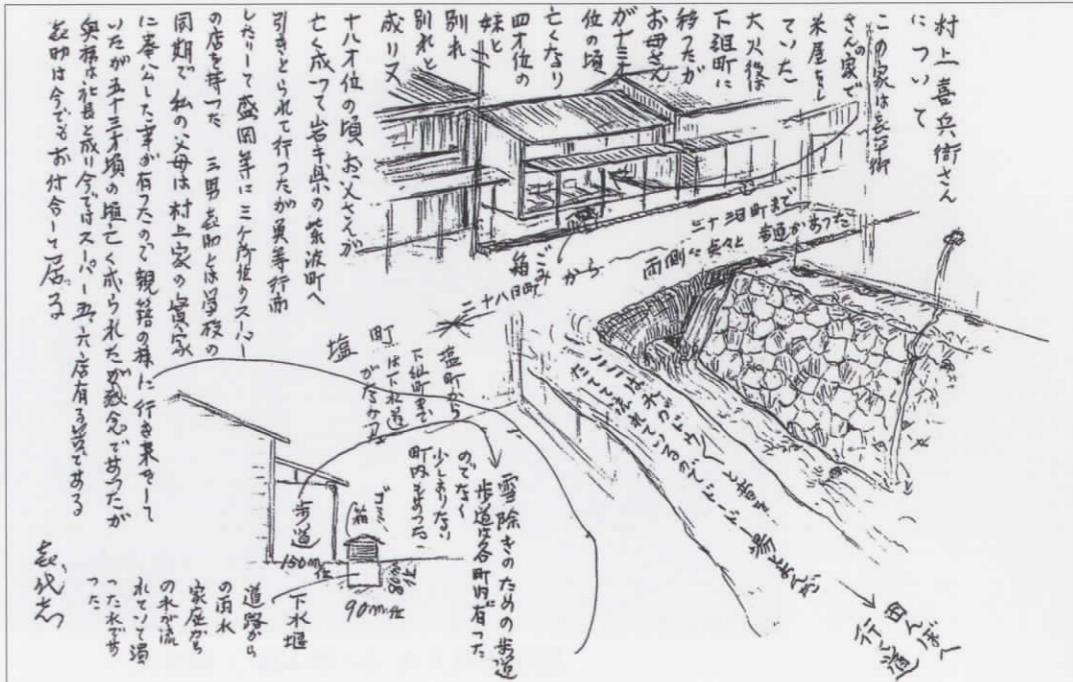
八戸藩では、消防体制の強化のため、さまざまの対策を重ねてきた。城下の七ヶ所に火廻り辻番所を設置し、昼夜常備の役人を配置し、警備警戒にあたらせていく。その中の一ヶ所は下組町の玄中寺角であった（寛文十一年・六七一）。或はまた城下に火災が発生した場



龍吐水（模型製作 奥山和雄）



箕と火叩き



「町堰とドド場」

現在では失われてしまったが、昭和も戦後の頃まで、塩町と一十八日町の境あたりに、通称「ドド場」と呼ばれる町堰があった。それは荒町から三日町を経由し、一十八日町のはずれまで通じていた水路で、塩町のドド場とも呼ばれていた。そこから下谷地方面の田んぼへ通じる水路へ、流れ落ちる水の音からドド場と呼ばれていたのである。

この町の中心街を流れる水路は、防火貯水槽等のなかつた時代、防火上重要な役割を果たすと共に 農業用水としても活用されたものであった。

「昔の火消し道具」

藩政時代の消防道具と云うと、「箕」とか「大団扇」「火叩き」「水籠」等が主なものであつた。箕は穀物を選別する農具であるが 火をあおいで、大団扇と同様、類焼をさけるための道具として利用された。火叩きは、屋根にとんで来る火の粉をたたき消すために使われ、竹筆に濾紙を張った水籠は、手桶どちらがつて軽くて丈夫なことから活用された。

そのほか、梯子や破壊用の薙口も重要な道具であった。龍吐水と呼ばれる手押しポンプが、江戸から八日町の酒屋の湯浅屋が買求めて、八戸に到着したのが 宝歴二年（七五二）のことであったと、藩日記にのせられている。

宝歴七年（一七五七）の四月には、八戸の城下の十四町内の代表者達が 町内単位の火防組織の設置を、藩に願い出て許可を受けている。その陳情の要旨は、十四町内で一百十人を消防夫として認められたいこと、水桶等の火防用具は、今回限りその制作費用をまかなつて貰いたいと云うものであった。

その結果、町火消の設置が認められ、それぞれの町印しの入った旗や堤灯が作られ、それが今日に受けつがれた自主義勇の非常備消防組織——所謂消防団の始りとされている。

だがこの町火消しは、維持経費の確保が、容易ではなかつた。そのため、大酒店と呼ばれる城下の有力商人、例えば美濃屋、大塚屋、近江屋等から援助協力を受けることが多くなつた。幕末も近い頃、八戸の城下では、八戸藩士による定火消、町民の組織した町火消、そのほかに有力商人による自衛消防組織の店火消によつて、火災対策がなされていた。

それも明治維新を迎えると、藩士による定火消は廃止され、明治の新政府によつて、市町村単位の消防体制の整備が指導されることになるが、住民達による消防組織の再編成と重なつて、変遷を経ながら、新しい組織が生まれることになる。

「店火消」

明治の新政府は、藩を廃止すると共に、行政組織として新しい県を置いて、従来の庄屋や名主を廃止し、戸長を置き大小区制を設けるなど、次々と新しい制度を発令した。従前あつた消防組織についても、次々と新しい組織の再編を進めたのである。

明治四年の七月には弘前県が生まれたかと思うと、九月には青森県と改称して青森に県庁が移されたり、寺小屋が廃止され小学校が作られたり、新しく徵兵制度が設けられる等、ま

合は、お城へ馳せつけること、或はまた火事場への出張の指示等（家中火事の心得）等を定めている（延宝一年・一六七四）が、なかなか効果は現われていない。

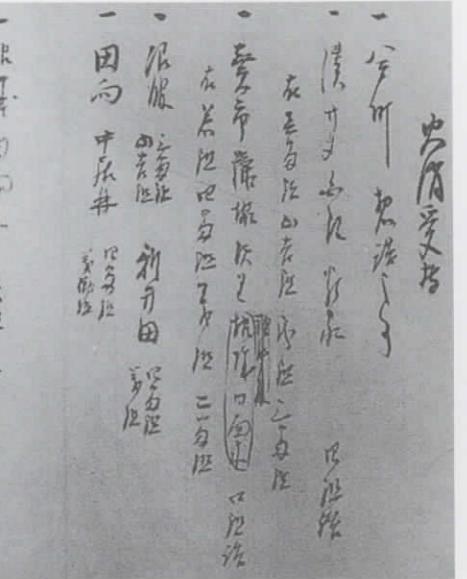
それは消防体制の不備ばかりではなく、恒久的な防火対策のおくれもあつた。満足な消防器材が備えられていなかつたほかに、消防ラインとして必要な、火除地の設定などがおくれていたからである。

大火の後に、藩では密集地の家屋の移轉、即ち町人町の拡張のための町割の改正や、街路幅の拡張や、町の中を流れる水路——町堰の延長や、屋並の規制（家の高さや軒の長さ）を実施している。塩町から下組町や柏崎新町が分立したのもその環であった。

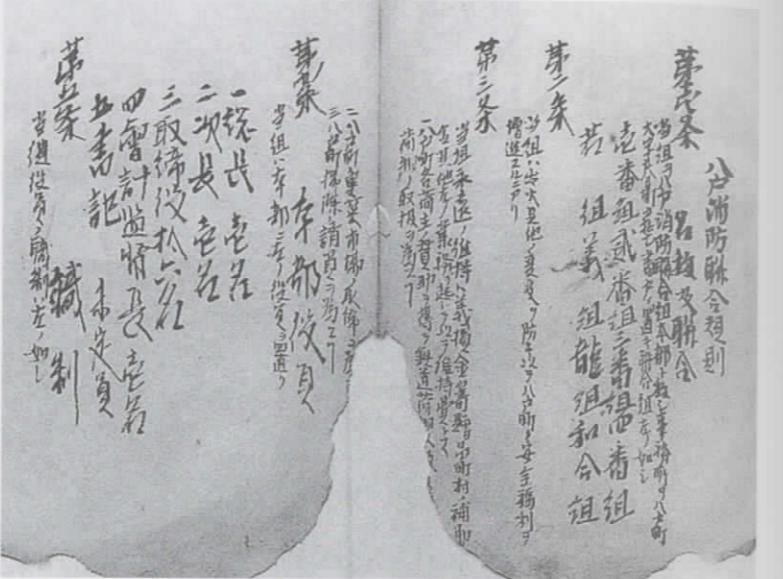
さに激動の時代の幕開けであった。

その頃の消防体制については、主として有力商人の「店火消し」が活動の中心であったとの話も伝えられている。火事が発生すると、火消し人夫達は、先づそれらの大店に駆けつける。そこに用意してある消防用具を借り受け、そこの酒樽の酒を飲んだ後に、火事の現場へ駆けつける。火災が鎮まるとき、また店にもどつて盛つ切り酒をご馳走になる。こんな様子がくり返されていたのが、その頃の有様であった。

明治維新の新しい行政課題として、消防組織の再編は、大きな問題でもあった。



火防受割付書



八戸町消防連合規則(鍛冶町屯所資料)

「舍組」

明治五年から八戸町戸長（町長）に就任した細川東作は、消防組の新しい編成を町の有力代表者達にすすめ、仁・義・礼・智・信の町内単位の組が生まれた。さらにその翌年三月には、その名称が番組制に改められた。

、八戸町 但シ各組不残二命受持
一、湊邑、白銀邑、鮫邑、類家邑 但シ壹組、三番組、
舍組、龍組受持

、賣市邑、糠塚邑、袖中居邑（外中居村）
但シ一番組、四番組、義組、若組受持

沼館村 但シ三番組、舍組受持

、田向村、中居林邑 但シ四番組、義勵組受持

、新井田村 但シ四番組、義組受持

明治七年五月舍組（塩町）

明治九年一月龍組（十日町）

明治十年一月若組（新荒町）

以上のように、番組と番外組の、公立と私立の消防組によって、明治の始め頃には消防活動が行われていた。

「舍組から和合組へ」

公式記録に残される塩町の消防組である「舍組」が、生まれたのは「明治七年五月」のことである。

舍組の舍とは、「三新」と呼ばれる十三日町の商人富岡新十郎の屋号である「ヤマ吉」に、由来するものだと云われる。「三新」は藩政時代からつづく大きな商人で、明治の頃の塩町のあたりには長屋や所有地があった。藩政時代には、廻漕問屋や呉服屋を営む大店の一つでもあったので、或は店火消しと云う関りが、その当時から塩町の人々にあつたのかも知れない。

明治七年当時の舍組の頭取は「武尾徳兵衛」であった。

その後、明治十四年四月には、八戸警察署長から出された、火災時の受持割付書にも、舍組の担当受持地区として、八戸町全体のほかに、類家や湊・白銀・沼館等の各村の名前があげられている。

この当時の消防活動は、火災の発生があれば、すべての消防組が、先を争つて駆けつけることになっていた。そのため火事場での先陣争いや、消し口争いが発生して、けんか争いやもめ事が絶えなかつた。そこで警察署長による「受持割書」の発令となるのであるが、ここでも「舍組」の名前が使われている。

おそらく幕末から明治の始めにかけて、活動をつづけてきたと思われる舍組が、いつ「和合組」に変わったかは定かでないが、公式記録に「和合組」の名前が登場するのは、明治十四年八戸町で、「八戸消防連合規則」が作られ、それにもとづいて、八戸消防連合組合本部が組織された中である。

その中に「連合組」として、「番組、一番組、三番組、四番組、若組、義組、龍組、和合組」とある。八戸町の消防組を本化し、これを公立消防組として新結成させるねらいで、行政指導が行われたものであった。和合組の組頭は塩町に住む武尾福太郎さんであった。舍組の頭取であった「武尾徳兵衛」の甥にあたり、その子孫の方々は、現在も八戸市内で菓子部が組織された中である。

関係の仕事に従事しておられる。

「和合組から第三部三号へ」

和合組の誕生については、別の説もある。それは、ヤマ吉「三新」の世話を受け、文化行政の頃から活動をつづけてきた舎組であつた。ところが八戸藩の天保の改革によつて、三新は商業活動が衰退する。そのため舎組は、明治時代になつてから「和泉屋」の手によって「和合組」として再出発したと云う説もある。

そのようなことがあつたとすれば、舎組と和合組は同じ組織で、名称が変わつたのではないか、とも考えられる。

河野市兵衛の「義組の履歴」に描かれた舎組の纏の図柄が、和合組のそれと同様のものであることが、その理由である。

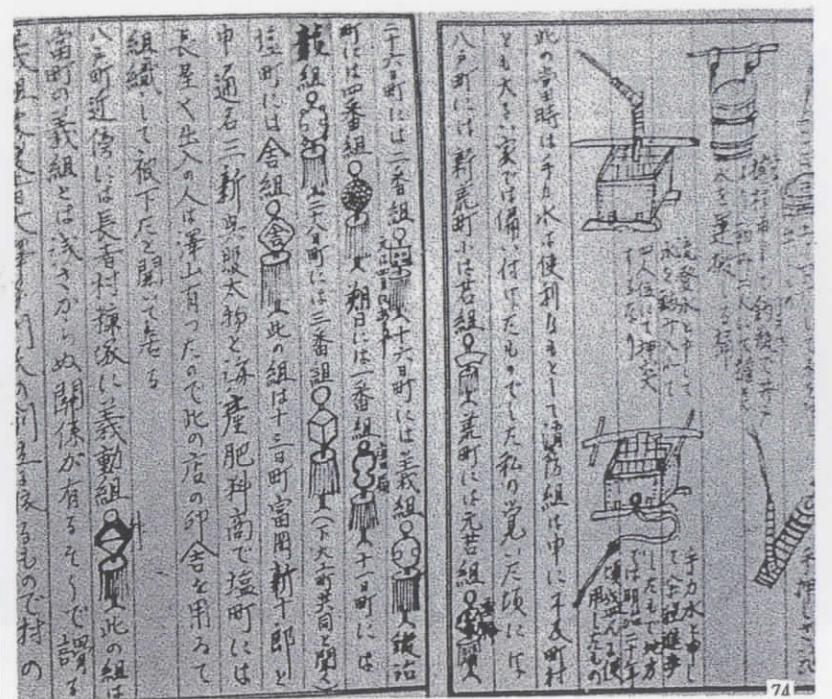
そのほか激動の時代であつた明治初年の世相を考えると、その反映が和合組にもあつたのではないかとも考えられる。

例えば、明治二十二年四月には、八戸は新しい町制に移行した。八戸の町には九つの消防組があり、消防費用も予算化されていたが、公立消防と云える内容ではなかつた。それに加えて、明治二十二年には憲法が発布され、国民の政治活動が盛んになつていて、即ち消防組が政治に利用され、組の対立が各地で激しいものがあつた。

つまり舎組から和合組への名称の変更は、江戸時代からつづく商家屋号をいたぐ町日消から、自立した市民団体としての消防組へと、新しい出発の決意の表明だつたのかも知れない。

その後、明治二十七年には、法律が改正され、消防組は県知事の許可する公立消防に本化されることになった。

今までの消防組は解散され、八戸町では新たに消防組を三部制とした。塩町の和合組は、



八戸町消防組織幹部（前列より）
福田耕造 北村 益 吉田紋次郎・苦米地虎衛

八戸町消防組第三部三号となり、新しい出発をすることになった。

「北村組頭就任」

明治一十七年（一八九四）法律の改正により、従来の公立や私立の消防組が解散され、青森県知事の許可する「八戸町消防組」が誕生した。即ち新荒町を第一部一号とし、町順に下つて第三部三号（塩町）まで編成され、番組から部制名称は変更されたが、幹部はそのまま引きつがれた。この改正は、健全な消防組の活動を促進するため、その費用は市町村に負担させ、その活動を警察の管理下におくことを段と強化したものであつた。その背景のつには、消防組の政党運動の下部組織のような動きが全国的に行われるようになつたからだとも云われている。

例えは八戸でも、町制がしかれて発足したのが明治二十三年、その後町会議員の選挙が行わることになるが、その頃の話題になつたのは、次のことであつた。

（青森県下ばかりでなく、八戸の町でも、公民会と土曜会の対立は、激烈なものがあつた。消防組の頭取を招いて、宴会を行つて、自派に有利な運動をするように強要した。選挙関係の用紙が町内に配布されると、それを暫時借用と云うことで、取りあつめさせるものもあつた。）

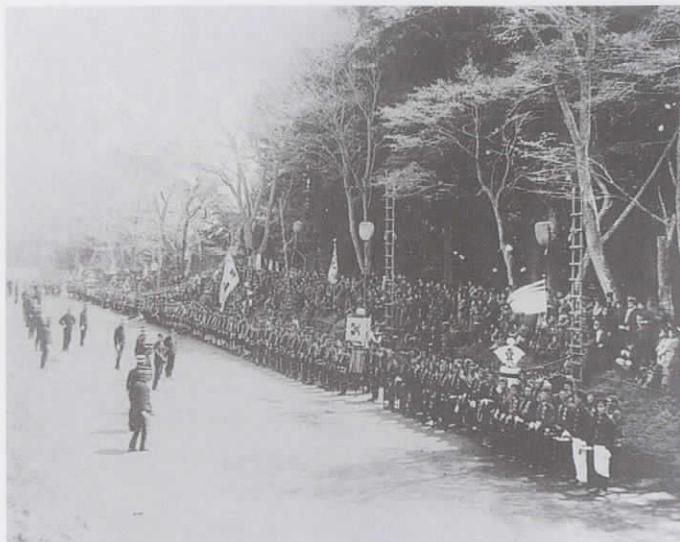
ちなみに、明治二十三年から同三十四年まで、八戸町消防組頭をつとめたのは、八戸土曜会の有力者で、人格識見にすぐれた「浅水礼次郎」であつた。

また明治二十六年から同四十年まで、八戸町長をつとめたのは、土曜会と対立した公民会（奥南派とも呼ばれる）の指導者でもあった「遠山景三」であつた。

土曜会と公民会のはげしい対立の中、消防員達の不満がたかまつた。それは町長が、消防組頭と折り合いが悪く、消防組の必要な経費も容易に支出しなかつたからだとも云われている。そこで浅水組頭は（この際、自分が職を辞し、後任者に消防の不満を解決することを



消防組頭北村益氏景仰碑（三八城公園内）



第1回八戸町消防組検閲式（明治35年5月13日 於 長者山）

託す」と決断をしたのであった。明治三十四年五月のことである。

だがその後継者問題は、政治や派閥が強くからみあって、難航を極めたのであった。そこで候補にあがつたのが、当時「八戸青年会」を通じ、青年教育や産業奨励に熱意を以て活躍していた「北村益」であった。北村は頑として一代目組頭就任をことわるが、再三にわたる消防組の代表の要請に、遂に受諾することになる。その経過については、北村益回顧録に記されている。

それによれば、北村氏の屋敷を訪れ、再三組頭就任を要請したのは、根城源太郎と類家鉄蔵（下大工町）の両名であった。一人は誠意を示すのに血判を以てし、指図に従うとの誓約をし、就任を承諾させたことである。

北村はこの時、両名に、まだ残っていた消防の悪習を、改めることを誓約させた。それは、第一に、出火半鐘の音を聞けば、先づ、町の大きな商店におもむき、茶碗酒をあおり火事場におもむくことの禁止。第二に火事場での陣取り争いの禁止。第三に消防組員同志による喧嘩の禁止。これらを守らぬ時は、いつでも組頭を辞任すると云うものであった。この誓約の内容は、まだ明治の三十四年頃まで、藩政時代からの町火消しの悪習が残されていたことを物語っている。

前にも述べたように、浅水初代消防組頭の辞任は、組頭と当時の遠山八戸町長との、対立がその原因であった。政治的に反対派であるとの理由から、町長は消防組を敵対視して、消防関係の費用の支出を制限した。そのため消防組員達は憤慨し、遠山町長襲撃をさける者達もあつた。そこで浅水組頭は、自ら退任し、ことを穩便におさめようとしたのであつた。このように、騒然とした政治情勢下の八戸の町で、消防組頭の後任選びは、なかなかに容易ではなかつたのである。さらには、消防組員の代表者による強い要請で、一代目の組頭の就任を承諾したもの、北村益氏にも、容易でない困難が目前に立ちふさがつていた。北村氏はその回顧録の中で、次のように述べている。

「私は当時、直接政党には関係しなくとも、遠山町長の反対派の浅水氏とは親戚であり、

消防組員からの推薦と云うことで、町長にとって、私の組頭就任は甚だ面白くないことであつた。町長とは何事も、話がうまく通じないばかりでなく、消防の新しい常備品の購入も認めない有様であった。改良したいことがあっても、相談相手にもなつては貰えなかつた。そこで、覺悟を決めて、自費を持ち出しても、消防組頭として、思うがままに振舞うことにして、八戸藩士の家に生れ、教育者であり、各種武芸の達人でもあつた北村益氏は、なみなならぬ決意で、組頭に就任したことがうかがわれる。そして早速、消防組の改革に着手したのである。

新組頭が就任第一に着手したのは、組員の資質を高めることであった。けんかや乱暴な振舞を堅く禁じ、訓練には、整然とした消防組を育成するため、軍隊式を導入した。消防屯所の新築奨励、さらには機材の整備、消防戦術から札式訓練等々、八戸町消防組の面目を新する改革が次々と実行に移された。

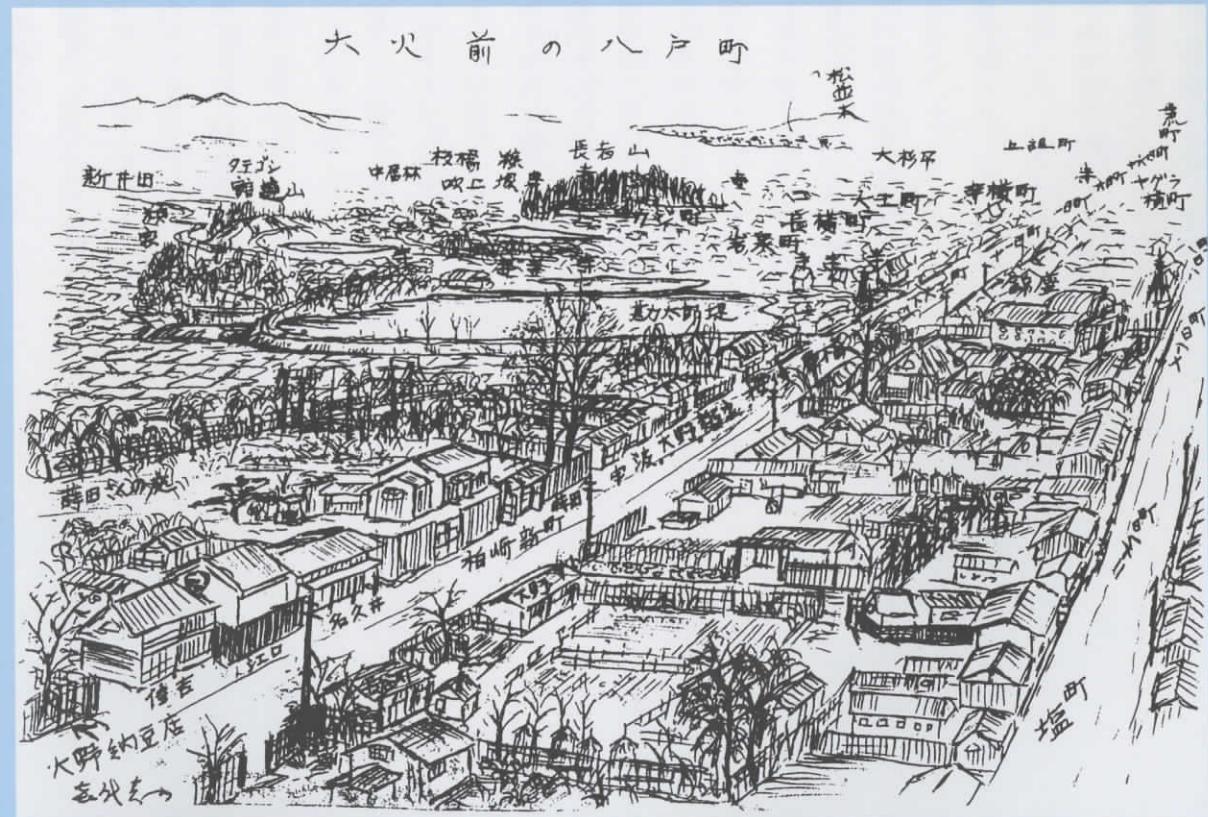
なかでも画期的だったのは、明治三十五年五月十三日に行われた「第1回消防検閲式」である。これは長者山・桜の馬場で行われ、日頃の訓練の成果と、組同士の競争心を高めるため「玉落し競技」も取り入れられた。玉落し競技は、腕用ポンプによる放水競技演習でもあつた。その後検閲式会場は、鍛冶町堤や縄手グランド等に移されることになるが、「消防演習」として、机や三社大祭とならぶ春の八戸の名物行事として、ながく受け継がれることになる。この放水演習もある「玉落し競技」は、昭和四十五年頃までつづけられていた。

何れにしろ北村消防組頭の就任は、その士気や厳正さ規模等、青森県下でも群を抜くものに面目を一新させた。そして大正九年五月十五日、一十年間で在任した組頭を勇退した。

八戸市三八城公園には、「消防組頭北村益氏景仰碑」が建てられている。そこには、北村氏は消防組頭となつて、私財を投じて事業改善につとめ、全国的に優秀な模範消防に育てあげ「実際に八戸発展開門の大恩人也」と刻まれている。

北村組頭の後継者は、三代吉米地虎衛氏、四代池田元治氏、そして五代目（八戸市警防团长）蒔田増藏氏「昭和十五年～昭和二十年四月まで」と続いたのであつた。

第一部◆八戸市消防団第二分団二班



長谷川竜代志さんの回想画

「明治時代の塩町屯所」

八戸消防組第三部三号に「和合組」が生れ変わった後の、明治三十一年三月日の、塩町屯所の建物及び使用器具等は次の通りと記録が残されている。

屯所

前口一間半 奥行一間 棟

屯所の器具

テレキ水器	台
手堤灯	十五張
斧	一丁
刺又	三本
旗	三個
玄蕃桶	三張
高張堤灯	三丁
楷梯	二十丁
鳶口	

以上が当時の消火器材である。明治一十年代になると、放水ポンプは、竜吐水から、テレキ水器に更新される。何れも木製の腕用ポンプである。大勢の給水係によつて、水を補給しながら、放水を行うものであつた。

大日本消防協会雑誌第二号

明治三十六年七月号

明治三十六年八月三十日發行
明治三十六年七月三十日第三回発行

大日本消防協会雑誌



第貳號

屯所に警鐘配備

明治四十四年四月一十八日 塩町屯所に警鐘が配備されることになる。

八戸町議会、四月の予算審議委員会において警備費が計上されたが、その内訳の項目に、八戸消防組第三部三号屯所に設置する警鐘がある。

この警鐘は、新築工事中の塩町屯所が来る五月の完成であることから、落成披露式に間に合わせて決議され、講入配備されるものであった。

この時新築中の塩町屯所は、木造二階建ての総檜作りの建物であった。これには望楼が上げられておらず、屯所横に一本足の火の見櫓が立てられて、予算計上された警鐘は、この火の見櫓に吊り下げられたものである。

屯所落成式

明治四十四年五月十四日 第三部三号屯所落成式

その模様を当時の「はちのへ新聞」は次の様に報じている。

八戸町消防組第三部三号では、今春一月以来、屯所新築に従事中、三ヶ月工事日数を費やし、経費千円を投じ漸くこの程完成したり。

午後 時より新築屯所楼上において落成式を挙行し、あわせて披露の宴会を開きたり。

列席者氏名左の如し

北村組頭、内田、苦米地の両部長、各消防組小頭および各町有志並びに新聞記者、警察官數名、計約五十名。

吉田三郎兵衛氏の開会の挨拶に始まり、北村組頭、宮巡查部長より簡単に消防の心得を訓示し、宴会に移り盛会のうちに午後六時退散したり。

「塩町屯所落成式を明日（開催する）」新聞記事

● 消防屯所落成式 當町消防組第三部三号にては屯所新築に従事中の處今回落成したるに付明日午後一時より消防に關係ある諸氏及び各新聞社を招待し披露宴會を開催する由

● 浅水大火と救濟

去る三日三戸郡淺田村浅水大火の報あ

けんぞく

事業

の姿

圓に

たる

に洗

りた

焚き

ラブ

大正の八戸大火

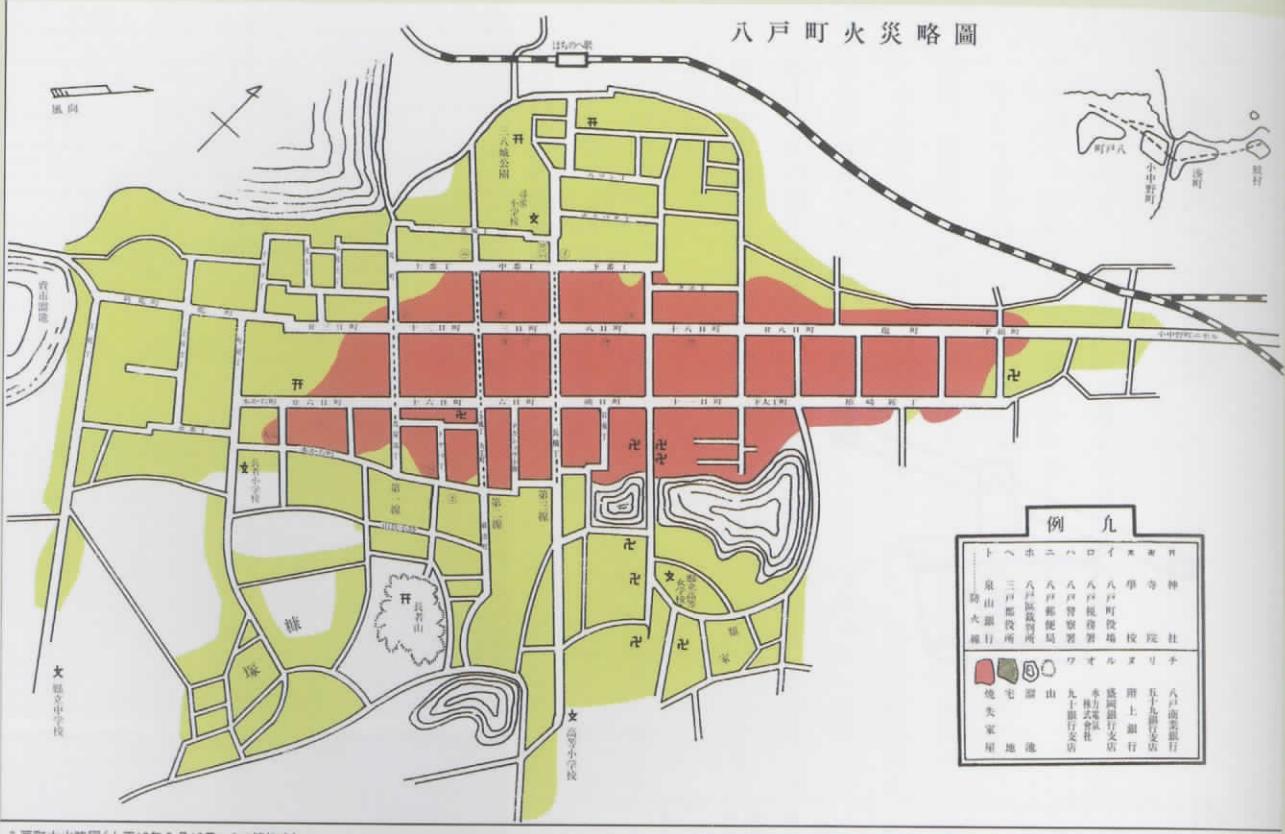
大正十三年（九一四）五月十六日。今でも語り伝えられる「八戸大火」が発生した。午前零時三十分、強い西風の烈風にあおられて、本鍛治町明石方から出火した火災は、八戸の町の目抜き通りから、当時の町の東の端であった下組町から柏崎新町まで燃えひろがり、三六五棟を焼失する大火となつた。

七ヶ家方面から出火と云うことで、十一日町から一十八日町、塩町等の消防も消火に駆けつけるが燃えひろがり、その消火団員の自宅も被災した者も多かつた。この大火で、七ヶ家、十六日町、十日町、一十八日町、塩町など、市内五ヶ所の消防屯所が焼失し、八戸消防は、壊滅的な打撃を被つた。

当時の八戸の町は、戸数三千三百八十七戸、人口は万九千五百六十人。商業の中心地の全部が焼失し、面の焼野原となり、「八戸町の八割が壊滅したと云つても過言ではない」（八戸町火災救済誌）と云われる程の大火であつた。

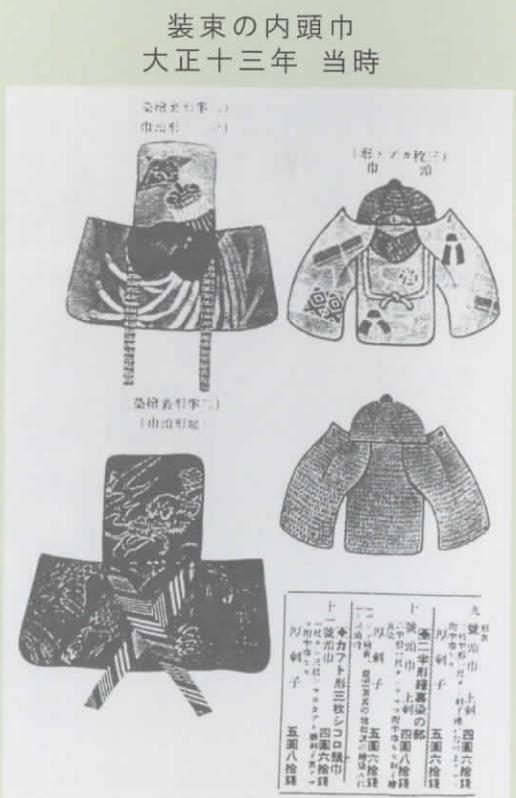
なお大正年代の火災としては、大正四年（九五）一月二十六日、一十八日町南角にあつた八戸唯一の劇場「当り座」（旧錦座）から出火、俳優市川荒一郎 座の俳優八名が逃げおくれて焼死。その供養塔が糠塚の大慈寺の山門前に建てられてゐる。

また八戸大火の翌年の大正十四年六月二十七日は、小中野町大火が発生、民家四百六戸が焼失している。



八戸町火災略図(大正13年5月16日1,510棟焼失)

「八戸大火略図」



装束の内頭巾
大正十三年 当時

八戸火災救済誌

第一章 緒 言

第一節 火災當時ノ光景

火勢漸々猛烈トナセ、八戸警察署長へ、遅早タニ戸、五戸警察署が署ニ急報シ、管内消防組ノ應援ヲ求キハ五戸、三戸、百戸、三本木ヨリ來援シ、出雲ノ消防署ニ二千有餘人、整列ボンノ一臺、號用ポンニ及ヒ、先ツ圖示ノ第一防災署ニ八戸、小中野、塩、鰐、大館、御ノ消防組ヲ集申シ、全力ヲ盡シタルノ第一第二第三ノ防火計畫モ其効ヲ奏セス、唯猛火ノ這フガ儘ニ任スノ口ムナキニ至レリ。斯クシテ八戸ノ全城ヲ燃燒シ、午前六時三十分風向ノ移動ニ依リ僅カニ鎮火セリ。

八戸町役場発行の火災救済誌



八戸警察署楼上より 三日町 長横町方面の惨状



屯所に馬曳きのガソリンポンプ配置記念

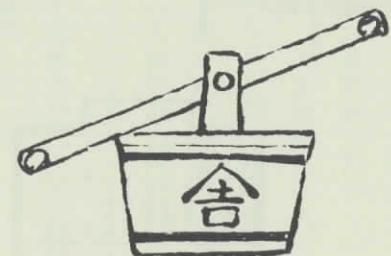
動力ポンプ配備

八戸大火や、小中野大火の痛手を背負つたまま、大正十五年はやがて、昭和と年号が改められることになった。

（明治四〇年九月一日八戸町役場）
湊町、鮫村の四町村が合併し、人口五万一千五百一十九人の八戸市が誕生した。この時八戸市の初代市長に、元消防組頭の北村益が選任されたが、これを固辞して受けなかつた。九月に近藤喜衛氏が就任するまで、選任市長が不在のままであつた。当時の政友会と民政党との対立で、政争もはげしかつたことをうかがわせる。

昭和四年六月、新しく発足した八戸市では、消防力の強化をはかるため、市制施行を記念して、新たに動力ポンプ六台（ガソリンエンジン四輪車）を購入した。これは従来の蒸気ポンプに較べると、性能もよく機動力にもすぐれていた。このポンプは大型四輪車のため、火災発生時には、馬にひかせて現場へ急行をした。そのうち、一台が塩町屯所へ配備された。

この当時、塩町や柏崎新町には、駄賃つけと云われた、荷馬車用の馬を飼育している農家も多かつた。火災発生時には、屯所のとなりの下野家の馬が、このポンプをひくことになつていった。その馬が都合の悪い時には、周辺にはすぐにも集る馬が飼われていて、ひき馬で不便をきたすことがなかつた。



八戸大火後製作した纏

八戸市廿八日町 木村徳次郎作

守水所工事

防火水そう工事
入札を報ずる記事

次郎△参考、久保益松外名△四等、白澤子々外三等、佐藤久五郎、佐藤正太郎、工藤久松、小笠辰榮次郎、佐藤久



卷之三

水そう工事 を報ずる記事

防火水そう完成の記事
大正14年10月7日付
奥南新報

た頃、馬は重要な物資の運搬のために重視され、このあたりには多くの馬が飼育されていた。柏崎新町の南側（下）の農業用水路には、馬の水遊び場があり、その近くには、馬の後産の埋設場も設けられていた。

ガソリンポンプの配備された頃の、消防組の幹部は、次の人々であった。

八戸消防組 組頭 池田元治
第三部長 蒔田増藏
小頭 沢田元次郎

なおこの年、昭和四年七月には、勘太郎堤の一部が埋立てられ、市設野球場として、縄手（駆）グランドが完成している。その後の柏崎小学校の敷地となつた所である。

昭和五年になると、在任期間の短かつた近藤喜衛氏について、神田重雄市長が一代目に就任した。

神田市長は、昭和六年度予算に、消防ポンプ自動車の購入費と、消防の常備部を設置する予算を提出。可決され、米国フォード製の自動車ポンプ一台（価格三千円）を購入、昭和六年四月一十日、常備部の第四部に配置された。

消防の組織や機動力の強化が、新しい市制の発足と共に、始まつたのである。

昭和四年五月一日、八戸市制がしかれると共に、消防組織もまた新しく改変されることになる。昭和五年一月には、従来の八戸町、小中野町、湊町、鮫村の夫々の消防組を合併して、新しく八戸市消防組が発足した。（組頭吉米地虎衛）。組織を第一部から第九部までとし、塩町は「第三部三号」となつた。

昭和六年三月には、八戸市初の自動車ポンプを購入し、八戸市消防組第四部（市役所）へ配備、さらに常備部が設置された。さらに昭和九になると、大正十三年の八戸大火後、仮住いをつづけていた消防屯所（二十六日町、十六日町、十日町、一十八日町、塩町）の建築計画が建てられ、八戸市では新年度に於て、実現を期することにした。

塩町屯所の新築も、十一日町や一十八日町と同じく、この年に行われたであろう。

昭和十一年七月には、支那事変（日中戦争）が始り、出征兵士の召集が行われ、世相は戦時色を強めていった。昭和十三年になると、屯所には「電動サイレン」が、非常用警報装置として配備されている。

昭和十四年には、警防団令が施行され、八戸消防組は「八戸市警防団」と改組された。これにともなつて、消防組織は部制から分団制に改められ、分団長、部長、班長が誕生した。

昭和十五年五月には、前任者の池田元治氏に引きつき、蒔田増藏氏（柏崎新町）が、警防団長（五代目）に就任した。

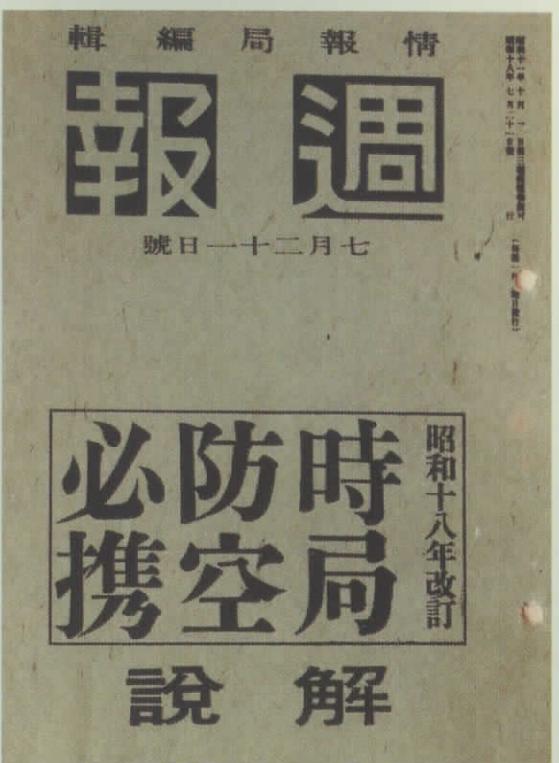
屯所に望楼を上げる

昭和十六年十一月は、大東亜戦争（太平洋戦争）が始り、八戸市でも防空演習や灯火管制が始まわり、敵機の来襲もあり、防火の任にあたる警防団員には、層の重責が課せられる戦時体制の時代を迎えていた。

ところが塩町の屯所は、市内の消防屯所の中でも中央に位置し、防空監視上重要な場所に位置していたが、残念ながら、望楼が附属していなかった。

望楼は、火災の早期発見監視と共に、敵機の来襲の監視哨の役割も果たす、重要な施設でもあった。そこで塩町消防の工作部長であった類家久次郎氏が、大工棟梁と云う職業を生かし、自ら設計図を引き、材料を集め、大工を督励して望楼建設にとりかかった。

けれども人手も物資も不足した戦時中のことで、工事は難航し、完成をみたのは、約一年後の昭和十九年十月のことであった。終戦を迎える十ヶ月程前のことであった。



週報
戦時防空訓練特集
昭和18年7月21日号



望楼の上がった塩町屯所
昭和36年の写真

昭和の屯所

自動車ポンプの配備

終戦直後の昭和二十年十月。ガソリンポンプ積載の「自動車ポンプ」を、配備することにした。これは青森市から、軍用トラックのシャーシを貰い受け、八戸市に運び、塩町の美玉鉄工所で改造し、これに昭和四年講入配置のガソリンポンプを積載したものである。このシャーシは、青森空襲で焼け残った軍用トラックのものであった。

苅田重郎さんや類家清志さんの談話によると、この時青森へは、苅田重次郎さん重一郎さん親子、類家久次郎さん清志さん親子に、城前千之助さんと岩渕自動車の人が行つた。ただ鉄枠にエンジンが付いただけのシャーシに、まずタイヤを調達して装着し、それだけでは乗れないので鉄枠の上に板を持つてきて敷き、その上に全員が乗つて夜通し走つて来た。途中でガソリンがなくなり、除隊したばかりの城前さんが天間林の施設からガソリンを調達してくれたりしたという。



積載自動車ポンプ配置記念



昭和 20 年 10 月 積載消防自動車ポンプ配置



昭和 20 年 10 月 積載消防自動車ポンプ

消防自動車更新

—日本初のポンプ車—

昭和二十三年一月一十五日。戦後初の本格消防ポンプ車が購入配備された。

トヨタ戦時型	八十一馬力
市原式三段タービン	五百ガロン

放水量
台
六十万円也

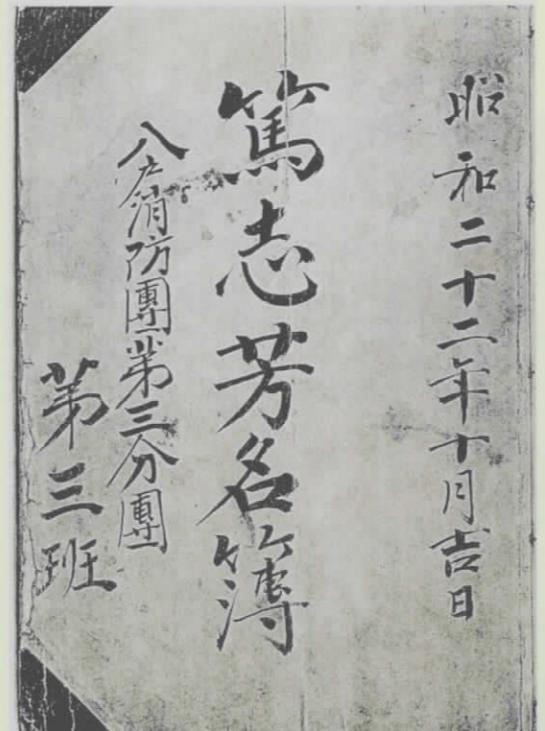
なお、八戸市で初の消防ポンプ車を購入配備したのは、昭和六年三月のことであった。その購入価格は、三千円であった。そして戦後の昭和二十三年、日本で初の水槽付ポンプ車を考案し完成させたのが、十一日町の田村義三郎消防団副団長であった。このポンプ車は、台に三トンの水を積み、早期消火に著しい効果をあげることになる。このポンプ車は、後に改良され、全国に普及することになる。

趣旨

終戦以来益々二年半余りを日復興の隆盛極の所を、東北を仙台次々大都市を破滅した此の弊害が御生ひ少く被害者を救ふ、我消防團の使命と日没す往進いたして有りま共に南から國分三班の自動車唧筒等小戰斧早急に旧車を修理整備致すのである萬能の心の者の方々ヨダハ空襲下の御上を渡らんと

皆様が醸軍事備へたがひりて、老朽と互いに後列底満足を活動が出来難きが故とちやうた現兵で重復使用して居るが、益々其の厚い難を以て、再び皆様の御上愛用思ふ事無く、何卒お預け頂くか、万全の検査を乞ふ思ふ取次右様の予算を修し新車改設備いたたく茲を懇意に之を次方で御度ます

豫算額
一金六拾萬圓也
内譯
一、自動車唧筒壹台
其他附屬品一切
右之通リ

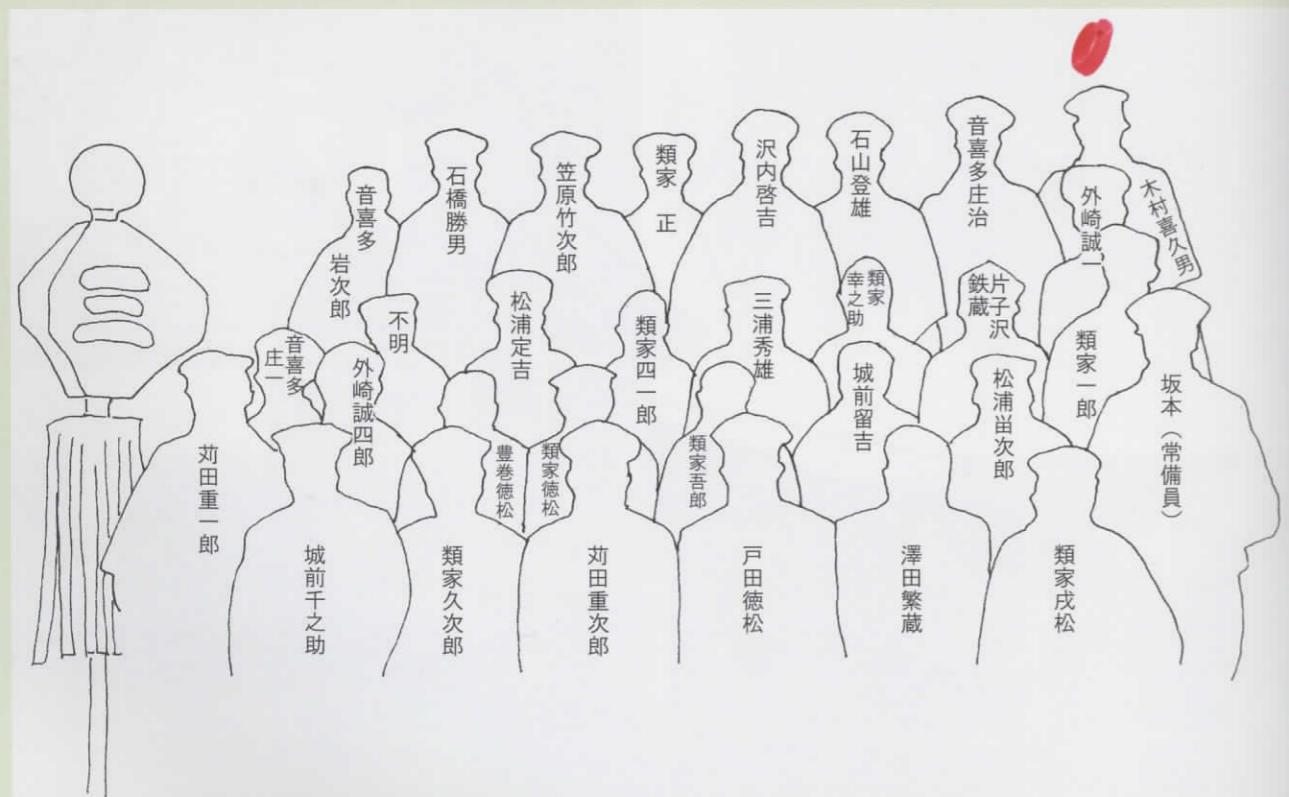


新しい消防ポンプ車購入に際しての寄付募集の趣意書



昭和 33 年 5 月 5 日 観閲式記念（三分団三班幹部）

昭和三十年九月一日現在
八戸市消防団第三分団三班團員氏名



昭和 33 年 5 月 5 日 観閲式記念（三分団三班幹部）



消防連合観閲式の分列行進の第三分団
先頭 立田重次郎 分団長
1932年5月3日 二十八日町東宝劇場前にて

望楼撤去

塩町屯所の望楼は、その型態がスマートで、市内の屯所のそれと比べても、自慢の出来る程のものであった。

昭和三十六年五月一十九日、この日の強風により、この望楼は運命の日を迎えることになった。午後から強まつた暴風は、新築中の第三中学校校舎を全壊させたのを始め、市内に被害を続出させた。この日の午後の瞬間最大風速は「三十八・五メートル」を記録し、市では「暴風対策本部」を設置した。

消防団では、団員の非常呼集を行つて、管内の巡回にあたつた。塩町屯所でも、非常招集された団員が、昼食用のパンを買ひに出たところ、急激な強風により、屯所の望楼部分が、めりめりと音を立て、傾き始めているのを発見。そこで部長は、そのまま放置すれば、周辺に被害を及ぼすおそれありとして、即時にこれを撤去することを決断した。早速団員に指示し、強風のおさまりかけた合間にみて作業にとりかかり、その日のうちに望楼部分の取り外し作業を終了した。

塩町屯所の、美しい望楼は、こうして姿を消したのである。

ちなみにこの夜、折から西の強風にあおられて「白銀大火」が発生、七百棟余りを焼失した。

消防車更新

昭和三十八年四月三十日。昭和一十三年に配備された消防車が、老朽化したため、新型車を更新配備した。

トヨタ ランドクルーザーFJ46型
ポンプ 市原式三段タービン
普通型消防車 乗員定員六名



昭和38年4月撮影 新しく配置された消防車



昭和三十六年一月六日



苅田重次郎さん叙勳

昭和四十二年十一月三日

勳七等青色桐葉章 受賞



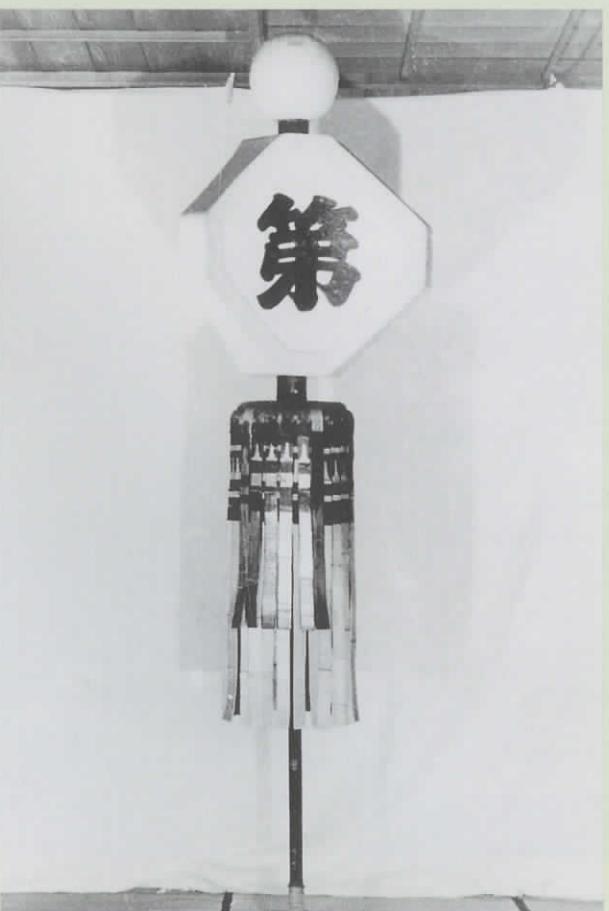
屯所移転

昭和四十三年十月五日、塩町屯所としてながいこと親しまれた建物は、次の場所に移転することになった。それは八戸市の都市計画に基づいて、新しく国道四十五号線バイパス（階上・沼館線）が作られることになり、屯所が塩町表通りとの交差線上にかかつたため、工事開始に先立ち、移転を余儀なくされたのである。

新屯所 八戸市柏崎四丁目十五の三十三（柏崎新町一十六の三）
(土地所有者、戸田徳市)

木造一階建 延 三二・六二m

〈塩町屯所の縁〉



隅切り角 馬簾 二十八枚 金五枚 朱一枚
十三キログラム 一文字振り





昭和 40 年 5 月 1 日 三日町



下野仁太郎さん方での記念撮影



上の写真は正部家さん方の庭に和合組の幕を張って花見をしている所。おそらく五月の観開式の後での行事。

城前千之助さん叙勲

昭和 52 年 4 月 29 日



勲六等瑞宝章受賞



長流寺にて



松浦定吉さんの纏振り

戦前から長らく絶えていた和合組の纏振りを復活させたのは、松浦定吉さんである。

当時塩町の纏は、十一日町の龍組から人が来て振っていたが、それではいかんと松浦さんが同級生から習つたものである。その同級生は三分団一班で纏を振っていた下大工町の石橋勇次郎さんで、塩町と同じ文字振りであった。

下野仁太郎さん方の小屋の前で、週間余り夜集まつて練習したという。昭和一十三年頃まだ二十才前だったそうである。

写真は、昭和五十三年五月三日
桜木町グランドでの観閲式で



昭和 53 年 4 月



昭和 56 年 5 月



昭和 53 年 5 月 3 日 松浦定吉さん（50 才）





第19回青森県消防操法大会 小型動力ポンプの部「優勝」
八戸市消防団（第三分団）平成8年9月6日 於 南郷カッコーの森

柏崎三丁目へ

さらにこの柏崎新町にあつた塩町屯所は、平成十年度、八戸市消防予算で、「塩町屯所の新築」が認められ、柏崎三丁目地内の市有地（正部家種康氏寄付）に、平成十年三月に移転した。平成十年三月七日、八戸グランドホテルに於て、「八戸消防団第三分団三班、塩町屯所落成祝賀会が盛大に開催された。

八戸市柏崎三丁目十 の八

建 物 一階建 一三二・一五²m



現在の屯所
平成19年2月3日撮影



第三分団三班は戸田総一さん（左側）



平成18年度 八戸市消防団による纏振り講習会
平成18年9月3日 水産会館



平成18年7月撮影
新しく配置された消防車

● 1997 平成九年三月四日
消防車更新

昭和三十八年配備した消防車が老朽化したため、新型車を配備した。
ニッサンアトラス TD27型
小型動力ポンプ付積載車
総排気量2700
KCISP8F23

世話役											
石橋	石山	上村	松浦	苅田	類家	類家	笠原	下野			
遵	登	木	定	重一郎	幸之助	正	竹次郎	仁太郎			
雄	一	吉									

元老											
戸田	戸田	大村	高橋	高橋	音喜多						
清一		喜久男	福太郎	福太郎	庄一						
		孝									

部分団長付											
平成十八年十月現在	沢里	津嶋	笠原	下村	中澤	内田	戸木	東澤	市澤	差波	類家
	健治	清寿	啓弘	雅広	雄一	孝行	総紀	浩由	眞樹	正樹	英明
							浩	伸	直	辰	章
							由	乃	樹	貢	武誠
								佑		弘	明好

十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	初代	順位
部長	部長	部長	部長付	部長	部長	部長	部長	小頭	小頭	小頭	小頭	小頭	小頭	小頭	職階
戸田	類家	栗橋	苅田	類家	高橋	松浦	櫻山	類家	高橋	高橋	岩渕	類家	武尾	武尾	氏名
徳松	千太郎	勝藏	重次郎	久次郎	市三郎	留次郎	金次郎	彦三郎	菊松	元次郎	専太郎	作太郎	福太郎	福太郎	
昭和二十九年	昭和二十五年五月二十四五日	昭和二十二年八月一日	昭和二十二年一月一日	昭和二十一年九月十三日	昭和二十二年六月十八日			昭和十五年七月六日	昭和十二年七月二十二日	昭和十年三月十一日	昭和五年十月二十一日	昭和二十五年九月二十八日			就任年月日
昭和三十四年	昭和二十五年十一月一日	昭和二十五年五月二十日						昭和十八年六月十八日	昭和十五年七月一日	昭和十年三月十日	昭和三十年五月二十日				退任年月日

二十五			二十四	二十三	二十二	二十一	二〇	二〇	二十九	二十八	二十七	二十六		
部長	分団長	団副長	部長	部長	部長	部長	分団長	団副長	部長	団副長	部長	分団長	部長	部長
笠原	類家	類家	類家	戸田	類家	類家	大村	大村	戸田	高橋	音喜多	片子澤	城前	城前
武明	隆好	隆好	隆好	清一	孝	彦松	茂久男	茂久男	德市	福太郎	庄一	鉄藏	千之助	千之助
平成十六年十月一日	平成十八年三月一日	平成十六年十月一日	平成十二年一月一日	平成九年十一月十二日	平成九年四月一日	平成六年五月三日	昭和六十三年四月一日	昭和六十年十一月八日	昭和五十九年六月十一日	昭和五十六年五月二十日	昭和五十六年五月二十日	昭和五十三年六月十日	昭和五十六年五月三十日	昭和四十五年二月一日
現在	現在	現在	平成十八年二月二十八日	平成十六年九月三十日	平成十六年十二月三十一日	平成九年十一月十一日	平成六年三月三十一日	平成三年十一月退社	昭和六十三年十一月三日	昭和六十三年四月三十日	昭和五十九年六月十日	昭和五十九年五月三十日	昭和五十六年六月十日	昭和四十五年二月二十二日

第三分団三班

和合組歴代幹部氏名



御

靈

名

簿

澤 高 戸 城 岩 岩 類 高 名 豊 松 福 松 楢 類 類 戶 松 松 類 岩 大
 久 田 橋 田 前 館 渕 家 橋 井 卷 浦 岡 館 山 家 家 田 浦 浦 家 渕 村
 松 吉 長 留 菊 德 吾 由 菊 德 岩 石 利 金 由 德 萬 吉 由 甚 久 與 鉄
 太 兵 五 太 次 太 太 三 次 三 次 太 太 次 三 次 三 次 五
 郎 衛 郎 吉 郎 郎 松 藏 松 郎 松 松 吉 郎 郎 郎 郎 郎

苅 類 近 松 武 福 久 美 住 類 高 高 宮 西 豊 佐 近 平 美 石
 久 田 家 藤 浦 尾 岡 村 玉 吉 家 橋 橋 本 村 嶋 木 藤 田 玉 橋
 政 初 萬 定 甚 三 福 石 馬 己 由 德 萬 定 小 文 善 清 竹 與
 太 藏 吉 郎 郎 郎 郎 郎 郎 吉 松 郎 郎 助 郎 郎 郎 郎 郎 郎
 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎

工 類 大 高 類 類 片 城 澤 笠 戸 類 類 細 類 苅 松 石 類 類 高
 平成十八年十月現在
 藤 家 野 橋 家 家 澤 前 田 原 田 家 家 越 家 田 浦 橋 家 家 橋
 文 彦 耕 米 清 義 鐵 千 繁 慎 德 富 吉 末 四 重 岩 勝 戌 千 多
 二 雄 松 朗 藏 藏 雄 藏 助 藏 一 松 藏 郎 郎 郎 男 松 郎 郎
 雄 松 朗 藏 藏 雄 藏 助 藏 一 松 藏 郎 郎 郎 男 松 郎 郎

岩 戸 類 福 類 丹 城 近 松 松 松 川 類 類 和 廣 岩 松 岩 高
 渕 田 家 岡 家 野 前 藤 浦 浦 浦 村 家 家 山 桶 渕 浦 渕 橋
 榮 末 彦 兼 要 長 常 善 金 石 浅 千 市 寅 卯 仁 竹 要 德 七
 助 吉 松 藏 助 吉 郎 藏 松 吉 松 吉 松 郎 松 松 助 松 平



類 岩 大 類 大 大 類 高 藤 古 高 松 大 笠 板 松 類 田 岩 松
 家 渕 村 家 渡 野 家 橋 澤 川 橋 浦 村 原 橋 浦 家 端 渕 浦
 彦 富 喜 千 初 清 京 專 權 雷 伊 岩 忠 石 新 雷 作 榮 卯 初
 三 太 太 太 太 治 勢 勢 勢 太 太 太 太 太 太 太 太 太 太 太
 郎 郎 一 桐 郎 藏 二 郎 郎 吉 松 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉



類 高 沢 城 類 松 下 石 岩 城 石 塩 石 高 類 類 大 藤 石 近
 家 橋 田 前 家 館 野 山 館 前 橋 入 橋 橋 家 家 村 澤 橋 藤
 留 菊 元 兼 竹 喜 源 亀 市 三 雷 仁 幸 清 仁 五 福 喜代
 次 吉 松 郎 松 松 八 助 吉 郎 郎 吉 吉 吉 學 一 太 郎 太 郎
 吉

住 高 音 高 泉 栗 住 正 中 山 高 柏 類 城 城 美 類 高 石 松
 吉 橋 多 橋 山 橋 吉 家 村 下 橋 木 家 前 前 玉 家 砂 橋 館
 幸 三 岩 倉 兼 勝 長 滿 千 德 市 清 市 萬 由 幸 千 善 要 八
 吉 郎 郎 松 松 藏 吉 三 藏 藏 郎 藏 郎 藏 郎 藏 郎 藏 郎 藏 郎
 吉

第二部◆塩町山車組



和合組の紋(輪違い)

家紋としては、南北朝時代(1336年頃)から使用されている。なぜ、和合組がこの紋を使用したか定かではないが、和が重なり合う=和合と考えられ、明治20年代に和合組が発足してから使用されたと思われる。昔の写真を見るとのが半纏ゆかた等に染めぬかれている。それが、現在も使用している紋様である。

はじめに

長い八戸三社大祭の歴史の中で、優勝制度は大正十五年から断続して來た。優勝は毎年一台、したがつて優勝山車は、現在まで六十九台を数える。塩町山車組による優勝山車は、その内十三台。他町内に抜きん出て多い。そればかりか、苅田重次郎さんが下組町で、類家清蔵さんが市職員互助会で、類家孝さんが淀、三菱製紙、新井田、八戸丸光でというように、和合組の人が他町内他団体で製作して優勝した山車は十台。それを合わせると二十四台にものぼり、全優勝山車の三分の二を越える。

このことははつきり言つておきたい。塩町和合組は、常に八戸の町の発展とともにあり、特に八戸三社大祭では自分の町内だけではなくこの大祭全体のレベルアップに多大の貢献をしているということである。今後も、この精神この心意気を持ち続けて行きたい。

塩町の山車は、当時の新聞等の記録では、明治三十四年に『大天狗』とあり、その後大正五年の『大石良雄』からはだいたい題名だけは残っている。しかし写真は残っていないようである。ここで少し、三社大祭の歴史をふりかえると、法領山と長者は山のお祭りに神明さんも参加して、文字通り三社大祭となつたのは明治二十一年のことである。そしてこの年は大日本帝国憲法が発布した年であり、各都市の消防組も新たな政治勢力として再編され始める。八戸もその例外ではなく、どの消防組もここで息を吹き返したように活動が活発になる。塩町も始めの舎組から和合組へと名称を替えて再スタートしたのが、記録がみつからないがどうもここからのようである。

そしてお祭りも三社大祭となつて、それまでの大商人による購入山車にかわって、各町内の若者連中による製作山車が加わるようになる。おそらく和合組も当初からこれに加わったと思われる。当時、塩町は八戸の東端、小中野町湊町へは必ずここを通らなければならぬという交通の要所で、大変賑わっていた。西の廿六日町が塩町のライバルであつたと伝えられているが、それはちょうどこの一つの町が八戸の町の両肩の位置と役割を担つていたからである。

当時の山車は、山の車という語源通りただの山で、それに滝を配して人形のつもつければ出来上がりであった。まだ電線も無い時代のことで、山の高さを競い、あんまり高く作り過ぎたおかげで行列に参加する前に倒れてしまつた山車もあつたという面白い言い伝えもある。山車作りにおける競争心は始めたからの物のようである。

第一章 明治と大正の時代

「はちのへ新聞」の投票制度



昭和2年 清水一角



昭和4年 加組の寅松



昭和3年 丸橋忠彌

大正十五年から始まった「はちのへ新聞」による優勝制度は、もともとあつた各山車組間の競争心に応じたものであつたかもしれないが、これがまた競争心に一層拍車をかけることになる。審査方法は、新聞に刷り込んだ投票用紙による投票で等には優勝旗が授与されるというものであった。

この優勝旗をめぐる争奪戦は過熱し、朝配達された新聞から投票用紙が抜き取られるとか、新聞の買占めがあつたとかといふ話は有名である。

しかしそれよりもつといふことがあつたことも確実である。つまり、これによって単なる町内同士の対抗意識から、もつと上の物を目指すという高い意識が生まれたことである。残された記録を調べると、このあたりから八戸三社大祭の山車は「日本の山車」への進歩発展を開始するのである。



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌



昭和3年 丸橋忠彌

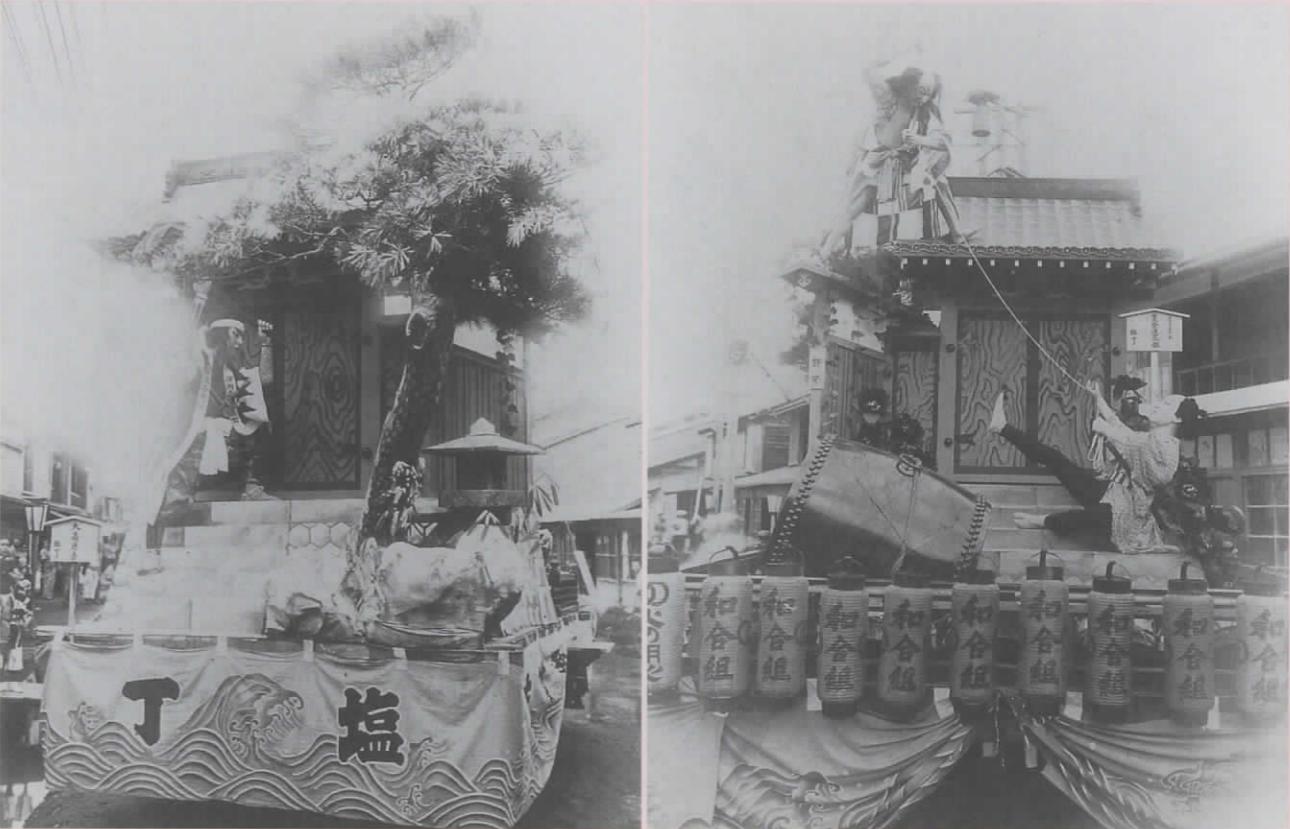


類家久次郎さんの山車作り

昭和の時代に入つてようやく山車の写真が出て来る。始めの三台は塩町屯所前での記念撮影である。この時すでに盛大なイベントになっている様子が伝わって来る写真である。また年々人の装いも微妙に違う。めまぐるしい流行の変化があつたようである。それにしても、昭和四年の写真の前列右から一人目の小便小僧には驚かされる。

昭和五年の一枚の写真は、山車の正面とそして珍しい見返りの写真である。見返りの発明は久次郎さんだといわれているが、記録では大正時代にすでに行われていたように見える。ただそれは滝とか木とかの付けたしのようなもので、もうひとつの場面であつたかどうかははつきりしない。重要なのはそれが場面として機能しているかどうかなので、その意味では、見返りの発明者は久次郎さんだといつてまちがいはない。

ひとつずつ山車がふたつの場面を持つということは、演劇的な空間がそこに生まれるということで、絵のような平面的な静止画像から飛び出して、山車がみずから動き出し働き始めるといふことである。八戸三社大祭の山車が「日本 の山車」へと進歩したという場合、その始まりはここからだといえる技術革新である。それをこのようにわざわざ写真に撮つて残すといふこと、いつもはみんなの集合写真なのに、この年だけは山車の前後だけというのも、その意義を山車の製作者はすでによくわかっていたようである。



昭和5年 見返り

昭和5年 夏祭浪花鑑

塩町の六年連続優勝

そして、ついに 優勝制度が始まつてから六年目に、塩町は初優勝を果たす。見事な建物山車で、舞台は大太鼓の上までせりだした屋根の上という、おそらく当時の人には映画を見ていいるような感動をあたえたであろう。

前の年の山車とくらべても飛躍的な発展を遂げた山車でこのあたりに久次郎さんの山車作りの開眼があつたに違ひないと思わせるものがある。

ここまで、そしてこのあとも、久次郎さんの山車は写真で見る通り概して小振りである。大きくなはない。当時の他の町内の山車の写真を見ると、異様にでかい物がある。いまの最大限と思われる山車より大きいのがあつたのである。写真で見る限り、久次郎さんにはそんな興味はなかつたようである。すくなくとも大きさでは勝負していない。そのかわり、この初優勝のリアルな工作、そしてなによりも人形の演劇的な動作の正確さに、久次郎さんの山車作りの職人技は現われている。

ところで連続優勝であるが、八戸三社大祭では、これが多いというのがひとつ特徴となつてゐる。三回以上のを拾つても、



昭和6年 新門辰五郎

昭和6年度 優勝旗



全優勝山車六十九台の実に半分以上がこれで、その製作者の数
というと六人に過ぎない。これは、山車の作り方にこれといつ
た定型が無いために、ある新機軸を打ち出して優勝した製作者
が、みんなに追いかれるまで優勝を続ける、というふうにも
説明できる。



昭和7年度 優勝旗

史上初の同じ製作者による連続優勝をなしとげた類家久次郎
さんの場合も、やはり先に言った山車に複数の場面を付け、そ
れを見事な工作のある舞台に配置し、まるで映画を見ているよ
うな演劇空間を演出した点が新機軸であつた。しかもこれは、
感心して見とれるのは簡単だが、作るとなるとかなりむずかし
い理論なのであって、戦前は結局かれに追い付く好敵手は現れ
なかつた。

あつと驚くデカさもなければ、意表を突いた化け物がのつて
いる訳でもない。どれも通向きの渋い場面ばかりである。しか
しこの時代、これがわかつてこたえられないというファンが多
かったのも事実である。おそらく当時流行し出した映画の影響
もあつただろうが、古き良き時代の趣味の傾向も物語ついている。
連続優勝の間にだんだん優勝旗が増えていって、それをまた
全部山車につけるものだから、写真では山車がよく見えないと
いううらみがある。



昭和8年 安宅丸



昭和8年度 優勝旗



昭和10年度 優勝旗

左から 近藤善太郎さん
下野 源助さん



昭和9年度 優勝旗



昭和10年 芝神明恵和合取組 め組の喧嘩



昭和9年 暮盤忠信



昭和22年 暮盤忠信



昭和11年 大楠公

第三章 昭和の時代 中期

戦後の塩町山車組

戦後の三社大祭の復活は早い。塩町も昭和十一年には山車作りを再開している。類家久次郎さんも健在で、二十三年には「め組の喧嘩」で、この年復活した優勝制度で早速七度目の優勝を獲得する。そして二十五年には同じ和合組の苅田重次郎さんが下組町の山車を作り優勝する。出し物は「里見八犬伝」久次郎さんはまた、八幡町（いまの内丸）の山車作りの指導も手掛けたそうである。戦前最後の山車の記録が昭和十四年の塩町と八幡町だけというのを見ると、それは戦前からの関係だつたと思われる。

昭和十一年の塩町屯所前での記念写真は、優勝したせいもあるで、この日は雨だったらしい。それでもサングラスが何人かいるのは進駐軍の影響だろうか。山車に雨覆いを被せるための枠がしつらえてあるのが懐かしい。

昭和二十三年の市庁前での記念写真は、優勝したせいもあるだろうが、戦後早々にもかかわらず、今よりも盛大なお祭りの様子がうかがわれる。八戸は空襲を受けなかつたので、人形も衣装も残っていたことなのかもしれない。

若者六人組の写真は、おそらくこの年だと思われるが法領山に山車が集まつた時、三日町の写真館に行って撮つたそうである。当時はこのように思い思いの出立ちであった。それでも定吉さんの襟の和合組はちょっと気になる。



塩町の六年連続優勝の後、時代は戦争が間近になつて昭和十四年には、塩町と八幡町（いまの内丸）の一台の山車だけといふさびしさとなつて、祭りは途絶える。その下で花見などをしていたものだという。これらの写真を見ながらの、正部家種康さんの思い出話である。

類家久次郎さんは大工であった。かれが棟梁として大正の末に建てたある御屋敷が、いまでもそのまま健在であるというほどの腕前であった。それだけにこの頃作られた建物山車には半端でない建物がついている。これらのどれであつたかわからぬが、そのひとつが、正部家さんの池のほとりに長い間、東屋として置かれてあつたということである。和合組の人達がよくその下で花見などをしていたものだという。これらの写真を見

いが、そのひとつが、正部家さんの池のほとりに長い間、東屋として置かれてあつたということである。和合組の人達がよくその下で花見などをしていたものだという。これらの写真を見ながらの、正部家種康さんの思い出話である。

類家久次郎さんは大工であった。かれが棟梁として大正の末に建てたある御屋敷が、いまでもそのまま健在であるというほどの腕前であった。それだけにこの頃作られた建物山車には半端でない建物がついている。これらのどれであつたかわからぬが、そのひとつが、正部家さんの池のほとりに長い間、東屋として置かれてあつたということである。和合組の人達がよくその下で花見などをしていたものだという。これらの写真を見



昭和25年 有馬猫騷動



昭和26年 天狗の安



昭和23年度 優勝旗



上左から
藤島文次郎さん
高橋 米蔵さん
類家 健蔵さん
類家 清志さん
高砂 信男さん
松浦 定吉さん

下左から



昭和23年 め組の喧嘩

「菅原傳授手習鑑 車曳の場」昭和二十七年

この山車の立派な人形は東京の人形師に発注して作らせた物で、東京に引き取りに同行した類家正さんの談話によると、それは前年昭和一十六年の夏まだ盆前のことだったという。

親方の類家久次郎さんに率いられた行は夜行列車で東京に乗り込み、そのまま人形師の所に行き、そこで人形を解体してみんなで背負って来たというのである。背中の荷物から手足がはみ出している行は、やはり今まで異様だったたらしく駅までの途中警官に呼び止められ、荷物を改められて「なんだ、人形か」といわれたりもしたという。結局東京には泊もしない強行軍であった。

当時、夏の間はこのように山車の製作から三沢や十和田などへの貸し出しへと、お祭りにかかりきりで、ろくに仕事をしなかつたという。

上の写真は、その見事な山車人形が、その年の秋の共進会で展示された時の記念写真である。久次郎さんや苅田重次郎さんも入って楽しそうであるが次の年の山車の人形を、こうやって公開するというのも、活気のある当時のやり方をしのばせて興味深い。宣伝効果もあったに違いない。というのも、この山車人形セットは翌年山車に乗せられて堂々八度目の優勝を飾るのである。



昭和27年 菅原傳授手習鑑 車曳の場



昭和27年度 優勝旗



昭和26年11月6日 菅原傳授手習鑑 山車人形展示 ~八戸尋常小学校 共進会~



昭和27年9月3日 町内の責任者

「壇の浦 義経八艘飛」昭和三十三年



笠原竹次郎さん
武明さん(3歳)親子



戦後も久次郎さんは三度も優勝しているのだが、実はこの戦後の十年余りに最も多く優勝したのは、村井治兵衛さんという人であった。この人は、六日町・朔日町・十日町の三つの町内の山車を作つて、合計七回優勝した。優勝制度もまた「はちのへ新聞」から観光協会に移つて、等だけでなく「等三等秀作」と賞も増えた。当時この三つの町内は成績が良く、毎年複数の山車が入賞し、三賞を独占している年もある。おそらく村井治兵衛さんはかけもちで三町内を指導したものと見える。

戦前が類家久次郎時代だというなら、戦後は村井治兵衛時代だったといえるだろう。しかし久次郎さんも負けた訳ではない。昭和三十三年、義経の八艘飛で九回目の優勝を果たす。

この山車は、久次郎さんの最後の傑作である。また、源義経は八戸三社大祭ではもともと多く登場する主人公だが、おそらくこの山車の義経以上の義経はいまだに無いような気がする。主役の姿を現さなければならない山車祭りでは、源義経は人気の割にむずかしい主役である。あれほどはなばなし戦績をあげながら大将軍でもなければ大政治家でもなかつた。正々堂々と名乗りあつてから戦う当時の礼儀作法を無視して、奇襲攻撃ばかりしていたし、その後は兄の頼朝から逃げ回つてばかりいた。晴れの姿がほとんど無かつた悲劇の英雄をどんな姿で現せばいいのか。

その回答がこれである。

鎧を着て船から飛び上がるというのは、現実には有り得ないけれども、芝居ではその真似事をし、三社大祭の山車ではそれを、映画のように現実のものとして表現して見せる。

この義経は、その体格からその姿勢その衣装とともにからなにまで素晴らしい。そしてその位置というと、山車のもつとも前のものつとも高い所なのである。船の工作といい、波やしぶきといい、カラー写真であつたらと思わずにはいられない。毎年壊してしまつた山車には似合わない表現ではあるが、不朽の名作であるといいたい。

山車作り三十餘年、類家久次郎さんは、八戸三社大祭の発展とともに常に自己研鑽怠り無くそれをリードして来たのである。時代は高度成長という新時代に入り、新しい山車製作者が現れても、それを打ち破つて見せる心意気は消えることはなかつた。



昭和33年度 優勝旗



昭和33年 壇ノ浦 義経八艘飛

それからもうひとつ、この年には特記事項がある。写真に山車よりも華々しく写っている全員揃いの浴衣である。いまでは当たり前のことだが、この年のこの塩町が、八戸三社大祭では史上初であった。こういうことは何でも塩町は他の町内よりも早くかつた、というのが年寄達の口癖である。



昭和35年 大江山 酒呑童子



靄神社に馬を届ける高橋福太郎さん



昭和36年 源義経弓流し



昭和34年 加藤清正 虎退治



昭和40年 耳なし芳一



昭和39年
鎮西八郎為朝強弓にて
敵船を沈める



昭和37年 白蛇伝



昭和38年 芝明神恵和合の取組



昭和45年 南締里見八犬伝芳流閣の場



昭和45年度 優秀賞旗

昭和四十年代に入ると、八戸三社大祭は大きな変換期に入る。日程が九月始めから八月二十日頃に変わり、山車も馬車から大型自動車の車台となり、山車の上には運転手が乗るようになる。そして発泡スチロールなどの新素材が、山車の作り方を大きく変えていく。類家町内が初優勝した後、そのまま連続優勝しながら、次々と新機軸を打ち出していた。

類家孝さんが登場したのはそういう時期であった。
昭和四十五年の「南締里見八犬伝芳流閣の場」は、人形的確な動作と配置、新素材による幻想的な舞台の出来映え、そして全体のきらびやかでありながらきつちりまとまつた無駄の無さによって、かれがたぐいまれな山車の作り手であることを最初から示したものである。

第四章 昭和の時代 後期

類家孝さんの山車作り



昭和42年 竹生島



昭和44年
菅原伝授手習鑑
(車引きの場)



昭和48年 火事と喧嘩は江戸の華



昭和46年 西遊記



昭和47年 常盤御前

「火事と喧嘩は江戸の華」昭和四十八年

この山車は出来がよかつたので前評判が高かつたが、優勝できなかつた。その時の審査員評に、火消しがオレンジ色の法被を着ているのは時代考証に違反しているとあつた。しかし八戸三社大祭の山車がよく手本にする歌舞伎からして時代考証には頓着していないのであって、むしろもつと派手な衣装を着ている。ファンタジーを歴史と違うと非難されても困る話、たとえば八犬伝に犬と人間は結婚できないはずだとケチをつけるような話なのだが、ともかくこれに懲りた孝さんは、後に山車の題名に「新」を付けるようになる。これは新しい創作なのだと銘打つことによつて、もつと自由な山車作りができるようといふ配慮である。

ちなみにこの山車は、大仕掛けによつて大型化する以前の山車の中で、屈指の傑作である。舞台の造作を、平面的な背景画風なものでなく、立体的なものにしたために、正面ばかりではなく三百六十度どこから見ても面白い山車となつてゐる。昔はこういう山車が時々出たものであつた。山車全体がこういうひとつの建物あるいは船とかになると、それだけでたいしたものなのだが、人形の動きや配置に相当な苦心と労作が必要なのであつて、それをまとめあげるのはかなりむずかしい。この山車では余計なものを省いて手際良くまとめている。手際が良すぎる所が前評判にもなり、もしかしたら優勝を逃す原因にもなつたかもしれない。無駄が無いというのは集中力のことである。作品完成に向かつて余計なものを排除するということは、反面とつつきを悪くする。無縁の人にはなんのことだか訳がわからなくなる。

ところでこの前の年から八戸市職員互助会が山車を出し始め、この年は優秀賞で三年目には優勝をさらう。山車製作者は塩町で孝さんの前任の類家清蔵さんであった。清蔵さんは久次郎さんの息子である。おそらくこれほど、有力な山車製作者がひしめき合つていた時代は無かつたかもしれない。

昭和五十一年度 最優秀賞旗



昭和51年 連獅子

また石友画廊の石橋宏郎画伯から、日光東照宮の装飾の仕方などを教えてもらい、山車に彫刻を付けるようになる。現在の三社大祭のきらびやかな山車装飾の始まりである。

左右両側に展開するようにしたために、山車は富士山型の極めて安定した構成美を持つようになった。そしてこれだけ舞台を拡大すると、その分内容を充実させなければならないし、それを混乱させずにまとめあげるとなると本格的な演劇舞台の演出力が必要となる。これはまさに類家久次郎さんが先鞭をつけた山車の作り方であるが、それを正當に受け継いで発展させた類家孝さんが、今度は連続優勝を始めることになるのである。

「連獅子」昭和五十一年

この山車によって、類家孝さんは優勝を初めて手にする。塩町にとつては十回目の記念すべき優勝である。

七度目の挑戦でようやくという感もあるが、有力な山車製作者があちこちに林立し、新素材による新しい山車の作り方などで、八戸三社大祭の山車作りのレベルはかなり高くなっていた。並大抵のことでは優勝はできない時代であった。

片方を開いて斜めに長く舞台を広げたり、引き出しを付けて背景を重厚にしたりと、毎年研究に研究を重ねて来た孝さんは、それらを総合してここで一挙に山車のワイド化を完成させる。



昭和49年 恵比寿大黒豪遊の場

昭和50年度 準優勝旗



昭和50年 大岡越前と町火消し



昭和53年度 最優秀賞旗



昭和53年 新五人石橋



昭和52年度 最優秀賞旗



昭和52年 (新)め組の喧嘩



昭和54年 南部 傑つみ

この八戸三社大祭の山車製作の向上に貢献したとして、類家孝さんと類家清蔵さんは、八戸市文化奨励賞を受賞した。



山車はもうこれ以上は無いというほど広げられたが、その色調は概して渋いということである。もちろんお祭りの山車であるから暗いということではない。派手な所は充分に派手なのだが、その全体の色彩の中に、目障りな色がまったく無いということである。色彩の統一ということなのだが、これはこれほど大きくて煩雑な物においては至難の業である。それをやり遂げた孝さんはさすがにプロフェッショナルなのだが、それ以上にその色調の底辺にあるやさしさである。見た目に突き刺さるもののが無いというのは、今では重要な要素である。癒しという今流行のやり方をそれは先取りしていたのである。

この後、類家孝さんは塩町を出て、淀、三菱製紙、新井田、八戸丸光の山車を製作して優勝を続ける。それは九連覇におよび、その間に八戸三社大祭は、名実とともに日本の山車祭りへと発展していくのである。



昭和54年 南部 傑つみ

山車の中央に『蔵』というどちらかといえば異常な舞台設定に、八戸では伝統的な『南部俵積み唄』のめでたい民謡を展開し、その上に『七福神』というこれまでためたい主題を重ねた山車審査の結果その小考と讃える

最優秀賞
南部 傑つみ
塩町山車組
山車審査の結果
その小考と讃える
昭和54年8月3日
八戸三社大祭協賛会
会長 於本功

山車の前面ばかりか後部にまで両開きの展開を付けて文字通り前後左右すべてを舞台化し、それらをまた人形の動きや配置によって流通させた、これまで嘗々と試行錯誤を積み重ねて来た山車のワイルド化の完成型を示したこの十年間の総決算的な作品。

これだけ盛り沢山な出し物にかかわらず、全体は少しもごてごてした感じを見せずに、むしろ控え目な色調とともに落ちていた懐かしさを観衆に抱かせるしみじみとした作品である。

これだけの場面と様々の人形をひとつ山車にまとめあげるというのは容易ならざる技なのだが、その演出という点についてはすでに指摘してある。その上にここでは、この色調について言しなければならない。かつて久次郎さんの山車については概して小振りであるということ、それでいながらその表現力は偉大であることを指摘したのだが、孝さんの山車の場合は、

塩町で類家孝さんが作った十台目の山車。

「南部俵つみ」昭和五十四年



昭和55年度 優秀賞旗





昭和61年 法靈神社 名馬の難病を救う場



昭和59年 塙ノ浦の合戦 義経の八艘飛び



昭和62年 (新) 鳴 神 (鳴神不動北山桜)



昭和60年度 優秀賞旗



昭和60年 (新) 七 つ 面



平成2年 忠臣 弁慶立往生の場



昭和63年 七福神と八戸風土記



平成3年 元禄風おりがみ遊び



平成元年 南部師行 出陣の場

第五章

平成の時代



平成 6 年 八百屋お七



平成 4 年 加藤清正の虎退治



平成 7 年 琵琶湖伝説 竹生島



平成 5 年 藤 姫



平成10年 かぐや姫



平成8年 南部政長 根城奮戦の場



平成11年 藤嶋賑七福神



平成9年 毛利元就 嶴島の合戦



平成14年 五人娘道成寺



平成12年 歌舞伎舞踊 花競姫姿舞揃



平成15年 かぐや姫



平成13年 京鹿子娘道成寺



平成18年 西遊記



平成16年 (新)め組の喧嘩

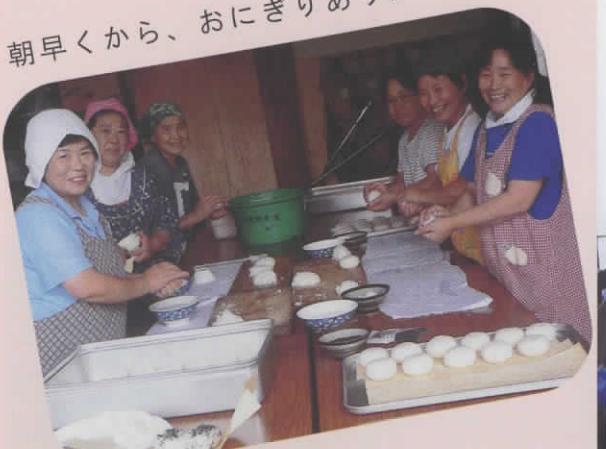


右から 伊東塩町町内会長
斎藤塩町町内副会長



平成17年 明暦の大火振袖火事（娘の祟り 江戸炎上）

朝早くから、おにぎりありがとう！

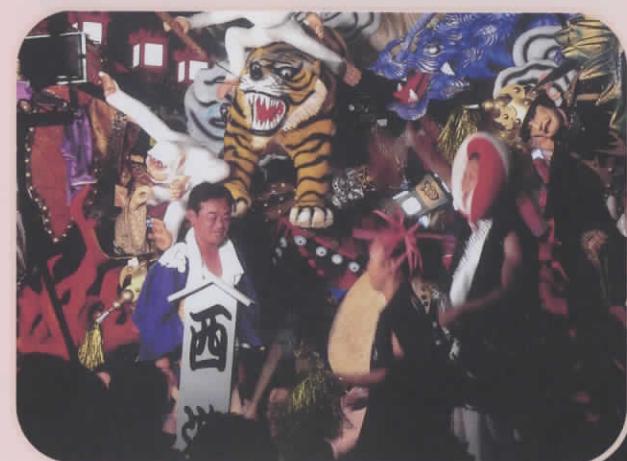


安全確認 中村雄一さん



合図する東 真教さん



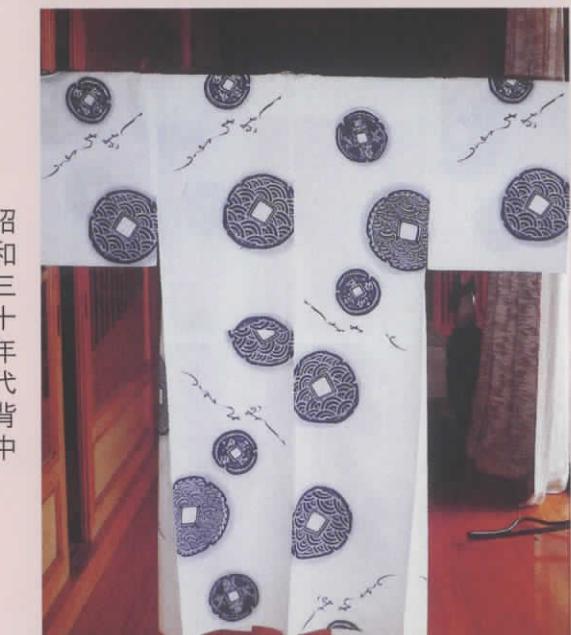


昭和二十年代正面



昭和二十年代背面

昭和三十年代正面

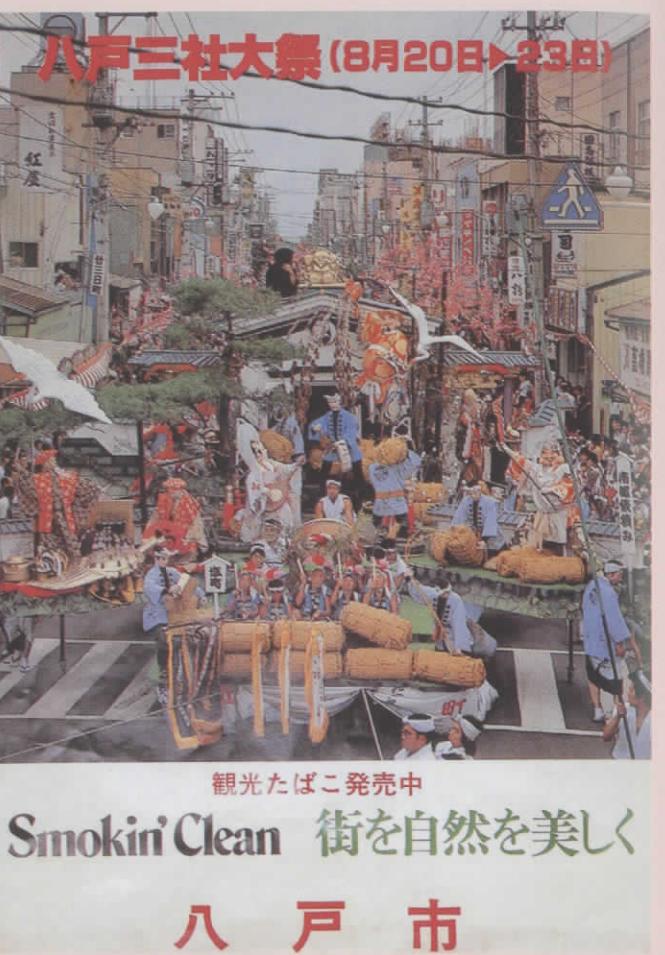


昭和三十年代背面

昭和四十年代



昭和五十年代以降



第三部 ◆ 塩町えんぶり組

年表

和暦		西暦		題名	賞	山車製作代表者	和暦	西暦	題名	賞	山車製作代表者	和暦	西暦	題名	賞	
明治三四四年	一九〇一年	大天狗			制度なし	記録なし	昭和二八年	一九五三年	大楠公			昭和五年	一九八〇年	助六由縁江戸桜	優秀	
大正五年	一九一六年	大石良雄			制度なし	記録なし	昭和二九年	一九五四年	義經千本櫻			類家久次郎	昭和五年	一九八一年	賑七福神と高砂	なし
大正六年	一九一七年	武林唯七間十次郎上野介を探す			制度なし	記録なし	昭和三〇年	一九五五年	鏡獅子			類家久次郎	昭和五年	一九八二年	三人吉席初買	なし
大正七年	一九一八年	曾我兄弟討入			制度なし	記録なし	昭和三一年	一九五六六年	茨木			田村安博	昭和五年	一九八三年	一ノ谷の合戦	田村安博
大正八年	一九一九年	平知盛			制度なし	記録なし	昭和三二年	一九五七年	佐賀の夜桜			田村安博	昭和五年	一九八四年	壇之浦の合戦 義經の八艘飛び	努力賞
大正九年	一九二〇年	松前鐵之助			制度なし	記録なし	昭和三三年	一九五八年	壇ノ浦 義經八艘飛			田村安博	昭和五年	一九八五年	(新)七つ面	秀作
大正一〇年	一九二一年	奥州安達ヶ原三段目			制度なし	記録なし	昭和三四年	一九五九年	加藤清正 虎退治			田村安博	昭和五年	一九八六年	法靈神社名馬の難病を救う場	なし
大正一一年	一九二二年	村上彦四郎錦旗を取り返す處			制度なし	記録なし	昭和三五年	一九六〇年	大江山 酒呑童子			田村安博	昭和五年	一九八七年	(新)鳴神(鳴神不動北山桜)	なし
大正一二年	一九二三年	大正二年			制度なし	記録なし	昭和三六年	一九六一年	源義経弓流し			田村安博	昭和五年	一九八八年	七福神と八戸風土記	類家隆好
大正一四年	一九二五年	大正一五年			制度なし	記録なし	昭和三七年	一九六二年	白蛇伝			田村安博	昭和五年	一九八九年	南部師行 出陣の場	正寿
大正一五年	一九二六年	大正一五年			制度なし	記録なし	昭和三八年	一九六三年	芝神明恵和合の取組			田村安博	昭和五年	一九九〇年	忠臣弁慶立往生の場	類家隆好
大正一六年	一九二七年	昭和二年	清水角		なし	記録なし	昭和三九年	一九六四年	鎮西八郎為朝強弓にて敵船を沈める			田村安博	昭和五年	一九九一年	元禄風おりがみ遊び	隆好
大正一七年	一九二八年	昭和三年	丸橋忠彌		なし	記録なし	昭和四〇年	一九六五年	耳なし芳一			田村安博	昭和五年	一九九二年	加藤清正の虎退治	類家隆好
大正一八年	一九二九年	昭和四年	加組の寅松		なし	記録なし	昭和四一年	一九六六年	六歌仙容彩			田村安博	昭和五年	一九九三年	琵琶湖伝説 竹生島	隆好
大正一九年	一九三〇年	昭和五年	夏祭浪花鑑		なし	記録なし	昭和四二年	一九六七年	竹生島			田村安博	昭和五年	一九九四年	毛利元就 嶩島の合戦	類家隆好
大正一九年	一九三一年	昭和六年	新門辰五郎		なし	記録なし	昭和四三年	一九六八年	児雷也			田村安博	昭和五年	一九九五年	鷹嶋賊七福神	類家隆好
大正一九年	一九三二年	昭和七年	湯殿の長兵衛		なし	記録なし	昭和四四年	一九六九年	南総里見八犬伝 芳流閣の場			田村安博	昭和五年	一九九六年	五人娘道成寺	類家隆好
大正一九年	一九三三年	昭和八年	安宅丸		なし	記録なし	昭和四五年	一九七〇年	芭原伝授手摺鑑(重引きの場)			田村安博	昭和五年	一九九七年	歌舞伎舞踊 蕪姫姿舞揃	かぐや姫
大正一九年	一九三四年	昭和九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和四六年	一九七一年	常盤御前			田村安博	昭和五年	一九九八年	五人娘道成寺	かぐや姫
大正一九年	一九三五年	昭和一〇年	芝神明恵和合取組		なし	記録なし	昭和四七年	一九七二年	西遊記			田村安博	昭和五年	一九九九年	燕嶋賊七福神	新め組の喧嘩
大正一九年	一九三六年	昭和一一年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和四八年	一九七三年	火事と喧嘩は江戸の華			田村安博	昭和五年	二〇〇〇年	明暦の大火 振袖火事	有馬猫騷動
大正一九年	一九三七年	昭和一二年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和四九年	一九七四年	恵比寿大黒豪遊の場			田村安博	昭和五年	二〇〇一年	新め組の喧嘩	天狗の安
大正一九年	一九三八年	昭和一三年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五〇年	一九七五年	大岡越前と町火消し			田村安博	昭和五年	二〇〇二年	新め組の喧嘩	連獅子
大正一九年	一九三九年	昭和一四年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五一年	一九七六年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇〇三年	新め組の喧嘩	森蘭丸
大正一九年	一九四〇年	昭和一五年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五二年	一九七七年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇〇四年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四一年	昭和一六年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五三年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇〇五年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四二年	昭和一七年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五四年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇〇六年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四三年	昭和一八年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五五年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇〇七年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四四年	昭和一九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五六年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇〇八年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四五年	昭和二〇年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五七年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇〇九年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四六年	昭和二一年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五八年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一〇年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四七年	昭和二二年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和五九年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一一年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四八年	昭和二三年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六〇年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九四九年	昭和二四年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六一年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五〇年	昭和二五年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六二年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五一年	昭和二六年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六三年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五二年	昭和二七年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六四年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五三年	昭和二八年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六五年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五四年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六六年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五五年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六七年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五六年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六八年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五七年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和六九年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五八年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七〇年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九五九年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七一年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六〇年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七二年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六一年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七三年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六二年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七四年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六三年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七五年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六四年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七六年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六五年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七七年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六六年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七八年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六七年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和七九年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六八年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八〇年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九六九年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八一年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七〇年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八二年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七一年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八三年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七二年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八四年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七三年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八五年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七四年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八六年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七五年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八七年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七六年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八八年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七七年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和八九年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七八年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九〇年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九七九年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九一年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八〇年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九二年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八一年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九三年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八二年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九四年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八三年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九五年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八四年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九六年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八五年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九七年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八六年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九八年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八七年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和九九年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八八年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇〇年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九八九年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇一年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九〇年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇二年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九一年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇三年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九二年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇四年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九三年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇五年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九四年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇六年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九五年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇七年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九六年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇八年	一九七八年	西遊記			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九七年	昭和二九年	碁盤忠信		なし	記録なし	昭和一〇九年	一九七八年	常盤御前			田村安博	昭和五年	二〇一二年	新め組の喧嘩	昭和二年
大正一九年	一九九八年	昭和二九年	碁盤忠信		なし											

塩町えんぶり組

塩町のえんぶり組と、和合組そして塩町の屯所は、八戸三社大祭の附祭と同じく、深い関りを持ちつづけてきた。

えんぶりはその歴史が古く、農家の人々が、豊年を祈願する民俗行事として伝承しつづけてきた。明治の始めの頃、八戸藩の最後の殿様が、百組を越えるえんぶり組の参加でにぎわう「えんぶり」を、町でご覧になったと記録に残されている。

藩政時代から受け継がれてきたえんぶりも、明治・大正・昭和と、時代が移り変ると共に、組の在り方を変えてきた。特に終戦の昭和一十年以降、農地改革で、えんぶり組の保護者であつた大きな地主や商人が失くなると、えんぶり行事に参加をしなくなる組もでてきた。例えば、古い歴史をもつた、沼館や類家から、えんぶりが姿を消してしまった。

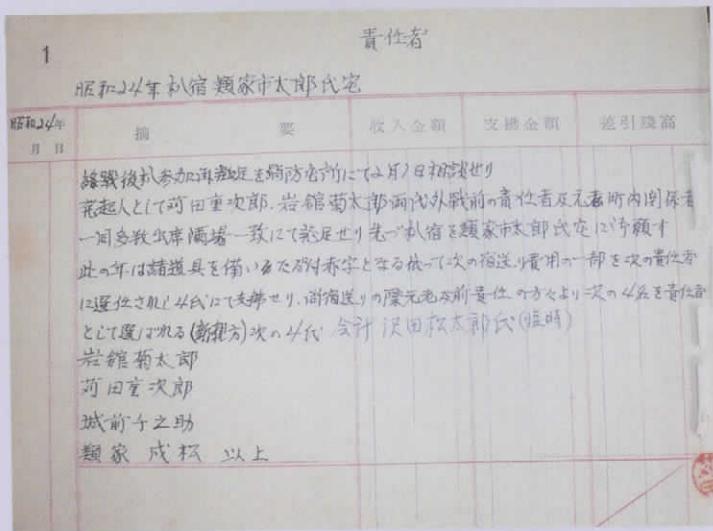
戦前は、えんぶり宿と云うことで、農家が交替で、鳥帽子を保管し、練習もその宿で行うことになっていた。時代が移り変り、昔のえんぶり宿の役割も、今では塩町の屯所が果たしつづけている。

戦後えんぶり再発足

昭和一十四年一月一日。塩町屯所では、えんぶり再発足の相談が行われている。えんぶりに参加する男達の居なかつた戦時中と、戦後の混乱期からようやく立ち直ろうとする時期に、苅田重次郎、岩館菊太郎の両氏が発起人となつて、えんぶりの再発足を呼びかけたのである。

戦前からの責任者、元老、町内関係者一同、多数出席し、「塩町えんぶり組」の新しい時代への発足が、満場一致で決定された。

えんぶり宿	
新親方	類家市太郎宅
岩館 菊太郎	苅田 市太郎
城前 千之助	城前 千之助
類家 戎松	類家 戎松
会計 沢田 松太郎	



昭和24年 えんぶり会計簿

えんぶり競演大会で第一位

昭和十五年、戦後初のえんぶり大会が、ロードの中央劇場で、盛大に開催された。戦後の復興期で、またアメリカ軍の占領下にあつた時代、そして娯楽の少なかつた頃である。塩町も参加出演し、堂々第一位に入賞し、優勝旗を獲得した。

そもそも塩町は、勇み肌で負けぎらいの若衆の多い所として有名であった。消防演習の各種の競技でも、名前の知られた選手の多いのも自慢であった。戦後の三社大祭の山車の競作で、多くの入賞を重ねたのも、その伝統の發揮と云うことであろう。

えんぶりには、えんぶり摺りのほかに、舞や南部芸能の演目も、数多くつけ加えられていた。何しろ戦前のえんぶりは、旦那衆の家へ入ると、数多くの「芸」を披露しなければならなかつた。金輪切り、豊年すだれ、しゃくし舞、とり刺し舞、それに茶番劇、さらには南部民謡や手踊り等々、各組がそれぞれ自慢の演しものを用意していた。

その中にあつて、南部芸能とも云われる「南部手踊り」は、えんぶりと共に、発展し、人々を楽しませてきた。塩町の場合、ほかの組に較べて、手踊りが有名であった。類家戊松、その弟子の類家岩藏等名人級と云われた踊り手がいたからである。えんぶり大会での入賞は、それらの人々のはなやかな活躍があつたからと云うことであろう。



類家徳松氏　自宅前にて（下段右から5人目）



類家専之丞氏寄贈記念
昭和55年2月



類家徳昌氏　寄贈記念
平成18年2月

年 日	摘要	収入金額	支拂金額	差引残高
昭和55年2月 25日	此年は戦後始て中央劇場にて公演復興あり 参加出演第一位にて優勝旗獲得す盛大であった 会計 沢田林太郎氏(准時)	2		

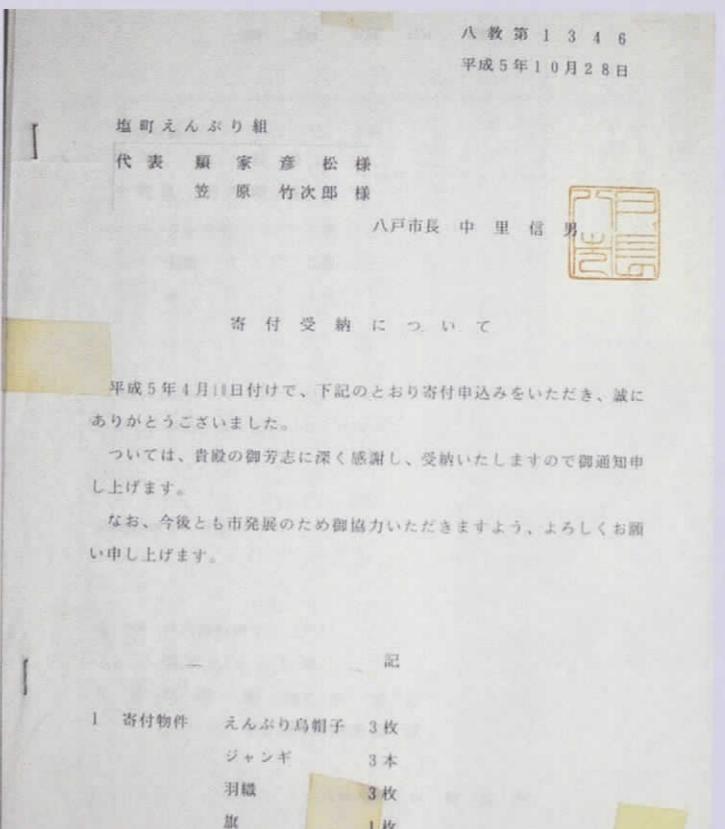
手踊り	太夫	笠原
	高橋	竹次郎
	米健	蔵
類家	類家	正志
館浦	戌松	志
岩家	岩正	太郎
正志	志	志



優勝旗は、平成5年10月28日　博物館に寄贈されている
(平成18年3月　博物館にて撮影)

博物館へ寄贈

平成五年十月一十八日。八戸市博物館へ、えんぶり組の旗(優勝旗)、鳥帽子、ジャンギ、羽織等を寄付をした。更新により、古いものを保存し、資料として活用して貰うためである。



八戸市長からの寄付受納書類



昭和25年 第1回 えんぶり競演大会 優勝旗
(平成18年3月 博物館にて撮影)



鳥帽子三枚

昭和二十五年二月
七尾英鳳作



羽織一枚



ジャンギ三本

百二十年前の鳥帽子里帰り

調査

塩町のえんぶり組の親方であった、故岩館菊太郎氏が語つておられたことがあった。

（塩町のえんぶり組が、昔鳥帽子を新調したので、古いものは、久慈のあたりに、ゆずつてやった。）

それは、大正年代頃なのか明治の頃か、はつきりしないが塩町のえんぶりは、よく岩手県の方へ、頼まれて巡業に行くこともしばしばあつたと云う。また八戸の出身者がそちらに移住した人があり、そんな縁故があつたのかもしれない。

古いえんぶり鳥帽子が久慈に保存されている、との情報に、塩町の石山登雄親方が調査を行つた結果、まぎれもなく塩町からゆずられたものであることを確認した。鳥帽子の図柄の中に、「塩町」の文字が明記されていたからである。

塩町えんぶり組では、このざつと百年も昔の古い鳥帽子を一度里帰りさせ、平成十五年のえんぶり行列に参加をさせた。



左から 笠原竹次郎
類家慎一郎氏
石山 登雄
下野益次郎

平成14年12月24日



和合組の印「○」と
鞍の所に「塩町」の文字が見える

平成15年2月 里帰りした鳥帽子（塩町屯所にて）



平成十四年（二〇〇一年）十一月一・十四日 久慈市へ
石山登雄・光子夫妻・笠原竹次郎・下野益次郎・類家章弘以上五名で久慈市天神堂へ住んでいる、類家慎一郎氏を訪ね天神堂生活館へ案内していただいた。鳥帽子は、ガラスケースに納められており、御神酒もおかれていた。高ぶる気持ちを落ちつけ、鳥帽子を取り出し、絵柄を観察すると、農耕馬の鞍の所に和合組の印のと塩町の文字がはつきり見えた。まちがいなく塩町の鳥帽子であった。大事に保存されていたため、色落ち、破損等が全くないことに驚いた。更にガラスケースの奥には、ジャン木三本が置かれていた。現在のものと比べると、やや小さめだがそのまま現在でも使用できる状態であった。

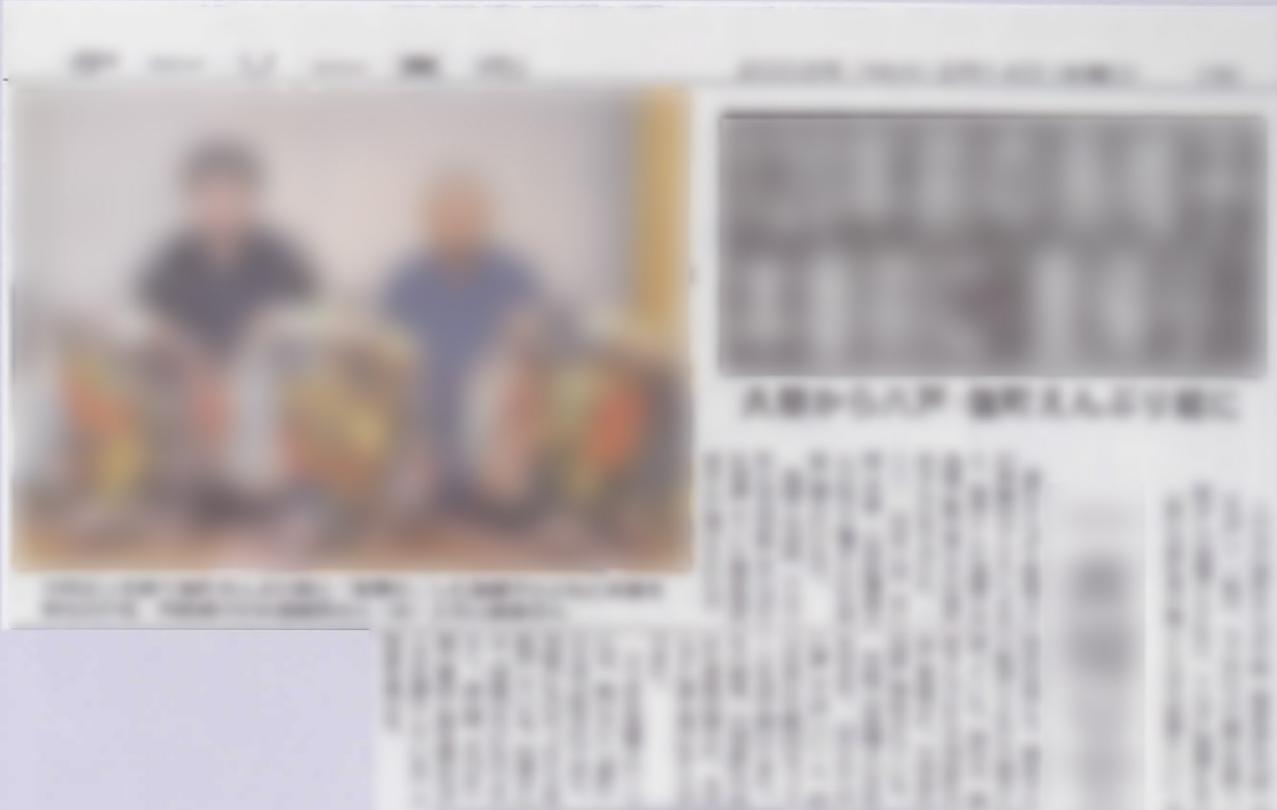
鳥帽子製作者 八八一（明治十四）年

木村徳次郎氏 作

鳥帽子寄附者 正部家正種氏（郷土史家） 正部家種康氏の祖父
当時親方 類家彦松（初代） 類家由松 高橋三郎

『この年のえんぶり期間は、テレビ・ラジオ・新聞等の取材で大変忙しくも、賑やかなえんぶりでした。』

平成十五年二月十八日（テ－リー東北）



南国沖縄でえんぶり披露

平成十五年十月十五日から十七日までの一泊三日の行程で、沖縄県那覇市に遠征した。これは、那覇市三越百貨店において「第五回青森の物産と観光展」が開催されるため、郷土芸能の宣伝事業の一環として、「えんぶり」を紹介することになり、当組が出演依頼された。

、日 時 平成十五年十一月十五日(土)～十七日(月)

二、会 場 沖縄三越 那覇市牧市一一二一三十

三、宿泊先 かりゆしアーバンリゾート 那覇市前島三一十

四、人 員 十三名

五

八 観 協 第 43 号
平成 15 年 10 月 14 日

塩町えんぶり組
類家 章弘 様

社団法人八戸観光協会
会長 天摩 正行

えんぶりの出演依頼について

時下、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
平素、当協会の事業運営につきましては、格別のご支援ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。
さて、「第五回青森の物産と観光展」が開催される沖縄三越百貨店において、郷土芸能の宣伝事業の一環として、「えんぶり」を紹介することになりました。
つきましては、下記の要領で出演をお願い申し上げます。

記

1. 日 時 平成 15 年 11 月 15 日 (土) ~ 17 日 (月)
2. 会 場 沖縄県那覇市 三越店
3. 人 数 13 名
4. 日程表 別紙の通り

月 日	日 程	宿 泊
11.15 (土)	(八戸) (東京駅) はやて 6 号 7:58 発～11:08 着 (浜松町) 11:17 発～11:20 着 (羽田) 11:28 発～11:50 着 (羽田空港) (那覇空港) 13:00 発～ 15:45 着 ホテルへチェックイン後 三越へ移動 荷物確認打合せ	(食事) 昼 夜 泊
11.16 (日)	えんぶり実演場所 ⇒ 三越正面入り口 (スペース 横 10m × 奥 3m) ① 14:00～ ② 16:00～ 予定 終了後着替え、荷造り	(食事) 朝 昼 夜 泊
11.17 (月)	(那覇空港) (羽田空港) 12:45 発～14:55 着 (浜松町) 15:16 発～15:39 着 (東京駅) 15:47 発～15:53 着 (八戸) はやて 23 号 16:56 発～ 20:04 着	(食事) 朝 昼



かりゆしアーバンリゾートホテルにて
平成15年11月16日



ホテルにて 平成15年11月16日



泊埠頭 水中遊覧船 11月17日

沖縄の夜

えんぶり終了後、ホテルに戻り観光協会の方と合同の懇談会を開催した。全員で自由なものを注文することにしました。沖縄料理は、私には合わないと思っていましたが、この日は、緊張もとけて、とてもおいしくいただきました。

その後、それぞれホテルの催物の見物又は参加しながら沖縄の地を満喫した様です。

ちなみに私は、観光協会天摩会長と前日に続き、泡盛で沖縄の地を堪能しました。

最終日（十月十七日）は飛行機出発までの時間、水中遊覧船で海中散歩を楽しんだ後は、首里城を見学することにしました。



沖縄県那覇市 三越百貨店前にて 総勢 13名 平成 15年 11月 16日

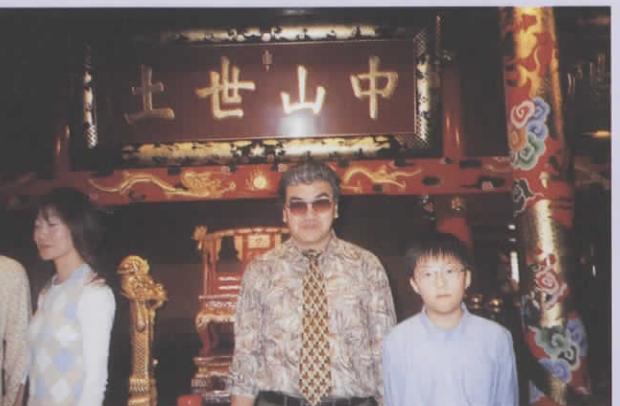


羽田空港出発ロビー 平成 15年 11月 15日
左から 2人目 天摩 正行 観光協会会長



那覇市かりゆしアーバンリゾート前にて
11月 15日
八戸に電話する石塚さん(いま着いたよ…)

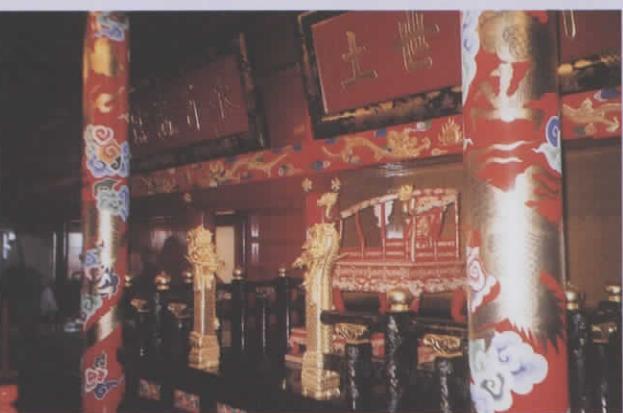
首塙城にて 平成15年11月1日



杉浦親子（義昭さん、啓太君）



疲れて休憩



豪華な彫刻と艶やかな色彩



全員集合 上段両端 観光協会の方（右 天摩会長）

十和田湖国境祭り

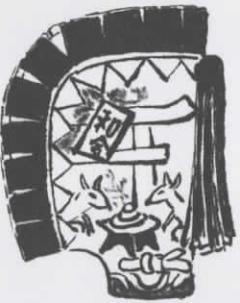
—始めて 鳥帽子3組で摺り—

平成十六年九月一日、十和田湖で行われた国境祭りに出演しました。国境祭りは、北東北3県の代表するお祭りが参加するので、十和田湖の大駐車場で行われる。塩町えんぶり組は、始めて3組の鳥帽子で県内外の方に摺りを披露しました。

午後の開会式では、十和田湖畔で当えんぶり組の演目を行いました。好天に恵まれた湖畔でのえんぶりはとても新鮮に感じられました。

その後大駐車場において、昼の部、夜の部と二回出演してきました。

今回は、三組の鳥帽子を組みましたがさすがに広い駐車場では、目立たなかつたかな!?



準備できた舞子



入場前 リラックスする太夫



閉会式



昼の部
大駐車場で



待機する鳥帽子



いよいよ入場



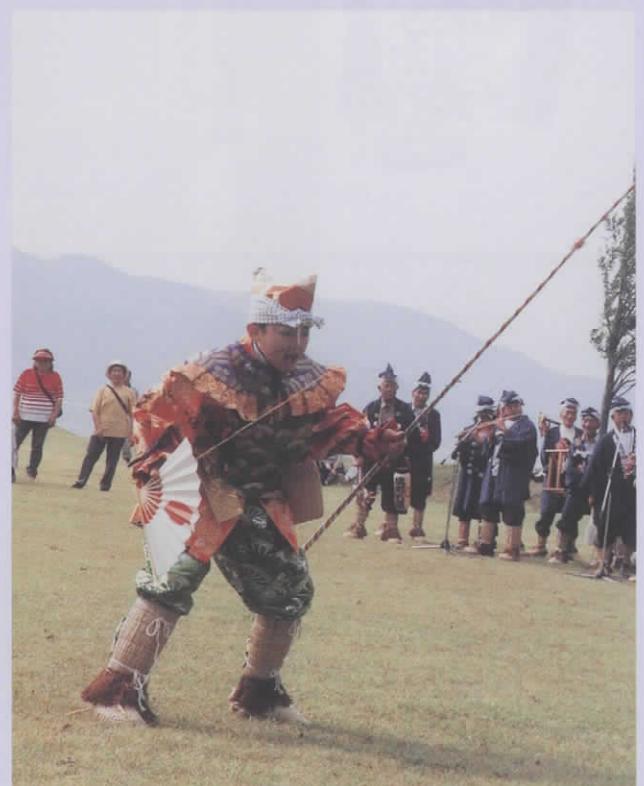
指揮する親方 左 石山登雄顧問 右 高橋清志さん



夜の部 いよいよ入場



十和田湖畔での摺り



恵比寿舞の杉浦脩太君



塩町えんぶり教室

平成十五年八月

長年、守り伝えられてきた、塩町の貴重の財産である「えんぶり」を後世に継承することを目的として子供教室を開講することにしました。

これは、時代とともに、当町内は人手不足に陥り、時、四日間の八戸えんぶり参加が危ぶまれた時期がありました。後継者育成が急務と考え、子供教室を立ち上げました。

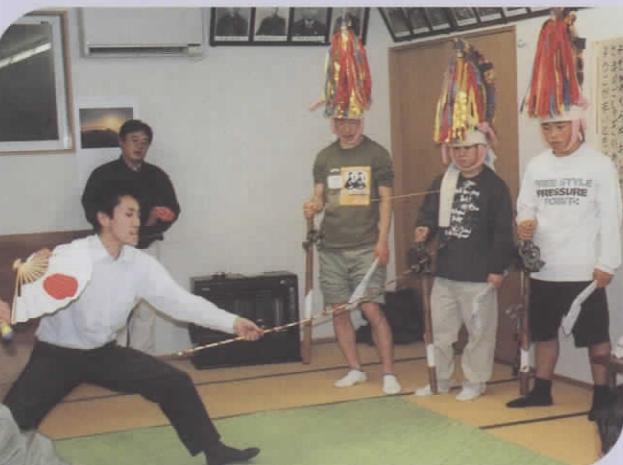
教室を立ち上げるため、目的を次の様に定めました。

「次世代を担う子供を対象に、伝統文化を体験 習得する場を設け、子供達が歴史・伝統に対する関心や理解を深めるとともに、仲間を尊重する態度を育て、豊かな人間を育成する。」ことを目的にしました。

えんぶり教室は、現在（平成十八年）も続けられており、今年で四年目になりました。（柏崎小学校 第三中学校に下記案内文で生徒を募集しています。）

先人達が、伝え守ってきた塩町えんぶりを、これからも、伝承していきたいと考えています。

えんぶり 教室



指導する中村雄一さん



親方 差波正樹さん



平成15年度郷土芸能えんぶり教室実施要項

塩町机組

1. 目的

次世代を担う子供を対象に、伝統文化を体験・修得する場を設けた。我が町の長い歴史と伝統の中から生まれ、守り伝えられてきた八戸市の貴重な財産である「えんぶり」を得て、継承するため、子供達が歴史、伝統に対する関心や理解を深め、尊重する態度を育て、豊かな人間性を涵養することを目的とします。

2. 期間

- 1) 平成15年10月11日～平成16年2月末日
- 2) 基本的には第2・4土曜日（学校行事により変更あり）
- 3) 午後3時～5時の2時間以内

3. 実施内容

- 1) えんぶりの歴史等を知るための講演会（郷土歴史家）
- 2) えんぶり実技（振り・舞・太鼓・笛・絃）

4. 場所

塩町コミュニティーセンター（塩町屯所） 地図参照
Tel 45-9090

5. 参加費

無料

6. 配慮事項

- 1) 参加者には傷害保険等に加入します。（負担者塩町机組）
- 2) 学校・生徒とは連絡を密にする。（出席等の確認）

7. 告白

参加者全員によるが、八戸えんぶり・卒業式等で披露したい。

8. 連絡先

参加希望者は、下記までご連絡下さい。
瀬尾重弘 090-7339-1389
差波正樹 090-2275-1782

9. 指導者

塩町机組責任者 以下20名

八戸市立柏崎小学校
校長 高橋 信夫

平成15年8月吉日

塩町机組
代表 類家 重利

郷土芸能えんぶり教室開講について（お願い）

謹啓：昨下、貴校におかれましては、学校内外において文武に活躍のこととお喜び申し上げます。また、平素から塩町机組の活動についてご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、この度仮称「郷土芸能えんぶり教室」を開講することにしました。これは、長年守り伝えられてきた市民の貴重財産である「えんぶり」を後世に継承伝えることを目的とし、子供達が歴史伝統に対して理解と関心を深め、豊かな心を育成することを目的にしています。

つきましては、この活動に対して從前と同様、御支援・御協力をいただければ幸い申し上げます。

記

1. 教室実施要項 別紙

2. 受入人数 20名位

3. その他 指導計画と評価については、机組が打ち合わせに参ります

4. 連絡先 別紙

案 内 文

えんぶり教室実施要項

講演する正部家種康氏



えんぶり子供教室講演会

平成十六年二月十五日

題 「えんぶりについて」

講師 國士史家 正部家種康氏

場所 塩町屯所

正部家光彦さん親子
(種康氏長男)



講演会前の様子



活動報告

結婚式にて
平成十六年十一月



「竹次郎さんハチマ
キまがってらじゅ！」

準備する舞子



左から
笠原竹次郎さん
石山 登雄さん



—みどり幼稚園—

平成十七年二月



—こうりん幼稚園—

平成十七年二月



—薄場皮膚科医院にて—

平成十七年二月



—イメルダ幼稚園—

平成十七年二月



—久慈市アンバーホール—
「新春歌と踊りのフェスティバル」

平成十八年一月二十二日



—久慈市立老人ホーム慰問—

平成十八年一月二十二日



—天神堂寮護園慰問—

平成十八年一月二十二日



いざ長者山へ

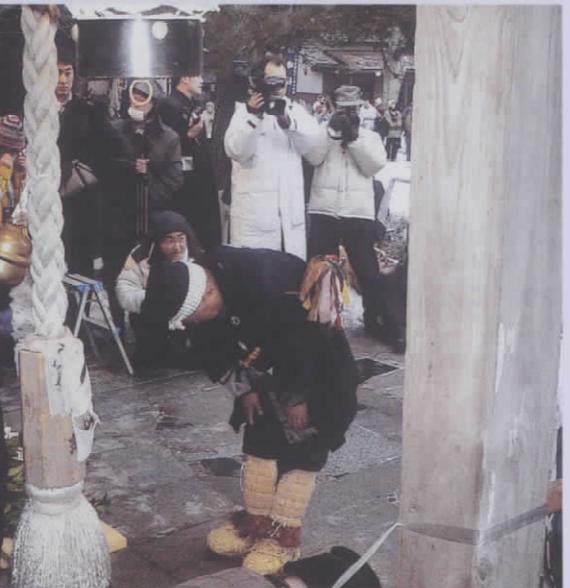
仮番号受付前の準備（審査）



いよいよ、本受付十三番



午前5時の新羅神社



新羅神社へ奉納



受付後の旗（新羅神社鳥居前）



長者山風景

仮番号受付後
襷をかけた順番目付奉行
石山登雄さん（顧問）





左 石山登雄さん
右 石塚 実さん



顧問半天の絵柄



市中一斉揃り 行列にて
(三日町)



三八城神社へ奉納



最終日　屯所前にて

平成十八年二月二十日

4日間で苦勞様！



—お庭えんぶり—
更上閣別館にて

平成十八年二月二十日



思 い 出



上左端 類家清蔵さん



昭和49年2月 八戸えんぶり



下段中央 類家四一郎さん



昭和52年2月屯所前

昭和59年
上左から

高橋美智子さん
笠原栄子さん
類家喜代子さん
細越リサさん
石山覚君
笠原皆子ちゃん

下左から



昭和30年ごろの六日町で



昭和24年頃 松浦定吉さん



後に見えるのは、イ梅ルダ幼稚園

左端から 城前千之助さん
石山登雄さん
類家義雄さん
戸田清一さん
松浦さん宅で昭和41年8月
右から2人目塩入さん

えんぶりアルバム



平成六年えんぶり大会
八戸公会堂



平成十一年えんぶり大会
八戸公会堂



平成十一年えんぶり大会に出演した舞子
右から 杉浦由香里ちゃん 曽我有希ちゃん





笠原竹次郎夫妻の子供と孫勢ぞろい



昭和59年2月 孫の皆子ちゃん



平成10年2月17日 三日町
太鼓は類家彦松さん



平成17年八戸えんぶり写真コンテスト市長賞 特選（岩岡徳衛氏撮影）
<平成17年2月17日 長者山撮影会にて>



平成11年2月17日 十三日町
左から 類家 隆好さん
高橋 福太郎さん
高橋 清志さん
松浦 定吉さん
下野 益次郎さん



平成12年2月17日 三日町



平成11年2月17日 長者山にて
佐々木京子ちゃん

平成十八年十一月現在の塩町えんぶり組名簿

へ 表彰者へ

八戸地方えんぶり連合協議会表彰
松浦 定吉さん 平成八年十二月

石山 登雄さん 平成十年十二月

下野 益次郎さん 平成十三年十二月

※ 塩町は、社会の急激な変化に組員の減少がすすみ、一時四日間の運行が危ぶまれた。しかし、右記の方々の熱心な後継者育成に努め、塩町えんぶり子供教室の開講等行い保存振興に尽力されたことを評価され表彰されました。

顧問	笠石山原	竹次郎
問問	笠石山原	登雄
舞子	まかない	世話役
市差山 加石内類澤五木戸一差類杉類三戸類笠高石塚原	ノ	
沢波村 賀山城家里戸村田渡波家浦家原橋		
伸正忠行勝由加彩靖皆總文直正義章清辰武清		
乃佑樹行雄晶香子子一雄樹壽昭弘貢一男明志実		
大戸高下松下杉森石木差澤杉目杉高河松丹高中笠		
村田橋野浦野浦山村波里波里浦時浦木原橋野木村原		
堺徳益定仁太郎光龍夢留愛沙耶		
久男市郎吉子也佳奈佳香太史太崇憲紘幸優一弘		
大戸高下松下杉森石木差澤杉目杉高河松丹高中笠		
村田橋野浦野浦山村波里波里浦時浦木原橋野木村原		
堺徳益定仁太郎光龍夢留愛沙耶		
久男市郎吉子也佳奈佳香太史太崇憲紘幸優一弘		



左から 石山 光子さん
杉浦あい子さん
森 アイ子さん

えんぶり歌詞

—塩町どうさいえんぶり—

摺り始め

「正月の祝いにドーサイ

松の葉を手に持つてドーサイ

祝いなさるものかに」 ハアヨイワサ

「今日は日もよいたねおろしで」

ドーサイ何石何斗とヤイおろした

ドーサイ千石千斗ヤイおろして

ドーサイ「千石だらにヤイ腰かけて

ドーサイ黄金のよじをヤイくわいて」 ハアヨイ

「代をかくにはヤイ白の馬

ドーサイむごにさんせんヤイ取らせて」

ドーサイ「花のこわきはヤイおん馬よぶ

ドーサイ花のむこにも取らせて」

「苗取川の中の瀬は

ドーサイ露をふみおろせ

ドーサイそれは何して取らない

ドーサイそれではぬれし取らない

ドーサイかいどり上げても取らないか」 ハアヨ

「ドーサイ今はうじるし、うんの花」

「ドーサイうんの花は咲き乱れ

「一本植えれば千本となる

「ドーサイ七、穂にヤイ八升となる、ドーサイ八穂の九

の升かな」

「内のだんな様ヤイ今盛る

ドーサイ四方のヤイ倉建てで」

中の摺り

「苗取川の中の瀬は

ドーサイ露をふみおろせ

ドーサイそれは何して取らない

ドーサイそれではぬれし取らない

ドーサイかいどり上げても取らないか」 ハアヨ

「ドーサイ今はうじるし、うんの花」

「ドーサイうんの花は咲き乱れ

「一本植えれば千本となる

「ドーサイ七、穂にヤイ八升となる、ドーサイ八穂の九

の升かな」

田植歌

1そのヤイ

今朝のはかば
千苅田の源は口

植たる若葉松
人は問わば

次郎と太郎の
人やい

植たる若葉松
人やい

次郎と太郎の
人やい

植たる若葉松
人やい

植たる若葉松
人やい

植たる若葉松
人やい

植たる若葉松
人やい

植たる若葉松
人やい

植たる若葉松
人やい

「鎌倉のヤイ嘉門之助、ドーサイ五月召したる片びら」

ドーサイかの上と下は、よもぎ、しょうぶ

ドーサイ中はうじるし、うんの花」

「ドーサイ七、穂にヤイ八升となる、ドーサイ八穂の九

の升かな」

大黒舞の歌

1舞 「春の初に福大黒は

宝をどつさり持つて舞来んだやー

唄 お恵比寿様を先に立てい

唄 福大黒は舞い来んだやー

唄 さあさあ舞い来んだやー

唄 「何を先に立て舞い来んだやー

唄 お恵比寿様を先に立てい

唄 福大黒は舞い来んだやー

唄 さあさあ舞い来んだやー

摺り納め

「ドーサイの口をヤイ揃いて
ドーサイこんでづづとヤイ積み重ね」 ハアヨ

イワサ

「かどのまげしはヤイよいまげし

ドーサイ入れてこづいてヤイたたいて

ドーサイたくもヤイたたいたよくたたいて

ドーサイこんじやくこんじやくとヤイたたいた

ドーサイハアヨイワサ

「えんぶりのヤイ藤九郎殿

ドーサイしりしりよせだヤイしりよせだ

ドーサイハアヨイワサ

「ドーサイ諸穀の宝をヤイ積み納め」

ドーサイえんぶりしり田ヤイ見ないか

ドーサイハアヨイワサ

「えんぶりのヤイ藤九郎殿

ドーサイえんぶりしりよせだヤイしりよせだ

摺り始め

「正月の祝いにドーサイ

松の葉を手に持つてドーサイ

祝いなさるものかに」 ハアヨイワサ

「今日は日もよいたねおろしで」

ドーサイ何石何斗とヤイおろした

ドーサイ千石千斗ヤイおろして

ドーサイ「千石だらにヤイ腰かけて

ドーサイ黄金のよじをヤイくわいて」 ハアヨイ

「代をかくにはヤイ白の馬

ドーサイむごにさんせんヤイ取らせて」

ドーサイ「花のこわきはヤイおん馬よぶ

ドーサイ花のむこにも取らせて」

中の摺り

「苗取川の中の瀬は

ドーサイ露をふみおろせ

ドーサイそれは何して取らない

ドーサイそれではぬれし取らない

ドーサイかいどり上げても取らないか」 ハアヨ

「ドーサイ今はうじるし、うんの花」

資 料 編



平成19年2月　屯所にて

年表

和歴	西暦	塩町・和合組の主なできごと	八戸地方の主なできごと
文治五年	一一八九		南部光行が頼朝より糠部郡を拝領したといわれている。
建武元年	一三三四		南部師行（根城南部四代）根城を築城する。
寛永四年	一六二七		盛岡藩主南部利直の命により、根城南部・南部直義は、遠野に移封される。
寛永七年	一六三〇		盛岡藩主南部利直が、自ら縄張をして八戸城（現在の三八城神社境内と三八城公園のあたり）を築き、現在に至る八戸の市街を完成させる。
寛文四年	一六六四		盛岡藩主南部重直死去。幕府は重直弟の直房に八戸一万石を与え、八戸藩が誕生する。
寛文十二年	一六七二	この頃の塩町は「御同心町」と呼ばれ、「同心」が多く住む役人の町であった。	
正徳時代	一七一〇	この頃、八戸藩の塩蔵が現在の電話局あたりに建てられたので、「塩町」と呼ばれるようになる。	
亨保六年	一七二一	この頃の塩町は「御同心町」と呼ばれ、「同心」が多く住む役人の町であった。	
文化五年	一八〇六	塩町が武家町から商人町となる。大火の後、藩は、防火対策の一環として、塩町の武家を柏崎新町に、柏崎新町の商人を塩町に移住させ、密集した町家の街地拡張を図る。	
明治四年	一八〇八	塩町の「舎組」の誕生。八戸町消防組の番外組（私立）として設けられる。頭取は武尾徳兵衛。	
明治七年	一八七四	塩町の「舎組」の誕生。八戸町消防組の番外組（私立）として設けられる。頭取は武尾徳兵衛。	
明治九年	一八七一	塩町の「舎組」の誕生。八戸町消防組の番外組（私立）として設けられる。頭取は武尾徳兵衛。	
明治十四年	一八七八	「和合組」が初めて歴史に登場する。この頃に「舎組」を「和合組」と改称。組頭は武尾福太郎。	
明治二十二年	一八八九	「和合組」が初めて歴史に登場する。この頃に「舎組」を「えんぶり」と改称。組頭は武尾福太郎。	
明治九年	一八七六	青森県参事より、えんぶり禁止令が出される。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
明治十四年	一九〇一	「えんぶり」が豊年祭として復活。	文化三年十月に大火（通称七ツ家焼け）
明治三十四年	一九〇四	青森県参事より、えんぶり禁止令が出される。	廃藩置県により八戸県と改称。同年九月には弘前県に合併し、弘前県を青森県と改称。
明治三十七年	一九〇四	日清戦争勃発。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
明治四十二年	一九〇九	日露戦争勃発。	文化三年十月に大火（通称七ツ家焼け）
明治四十四年	一九一一	八戸町に電話開通。	廃藩置県により八戸県と改称。同年九月には弘前県に合併し、弘前県を青森県と改称。
大正五年頃	一九一六頃	八戸町に電話開通。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
大正十三年	一九二五	八戸町役場でガソリンポンプ六台購入し、その一台を第三部三号（塩町）に配備。	文化三年十月に大火（通称七ツ家焼け）
大正十四年	一九二五	八戸町役場でガソリンポンプ六台購入し、その一台を第三部三号（塩町）に配備。	廃藩置県により八戸県と改称。同年九月には弘前県に合併し、弘前県を青森県と改称。
昭和三年	一九二八	八戸町役場でガソリンポンプ六台購入し、その一台を第三部三号（塩町）に配備。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
昭和四年	一九二九	八戸町役場でガソリンポンプ六台購入し、その一台を第三部三号（塩町）に配備。	文化三年十月に大火（通称七ツ家焼け）
昭和五年	一九三〇	八戸市消防組発足。塩町は八戸市消防組第三部三号となる。	廃藩置県により八戸県と改称。同年九月には弘前県に合併し、弘前県を青森県と改称。
昭和六年	一九三一	八戸市消防組発足。塩町は八戸市消防組第三部三号となる。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
昭和十一年	一九三六	八戸市消防組発足。塩町は八戸市消防組第三部三号となる。	文化三年十月に大火（通称七ツ家焼け）
昭和十四年	一九三九	八戸市消防組を八戸市警防団に改組。部制から分団制へ。塩町は八戸市警防団第三分団第三班となる。	廃藩置県により八戸県と改称。同年九月には弘前県に合併し、弘前県を青森県と改称。
昭和十六年	一九四一	第三分団第三班（塩町）は、トラックシャシーに手曳ガソリンポンプを積載、自動車ポンプに改造して配備。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
昭和二十年	一九四五	第三分団第三班（塩町）は、トラックシャシーに手曳ガソリンポンプを積載、自動車ポンプに改造して配備。	文化三年十月に大火（通称七ツ家焼け）
		八戸空襲。太平洋戦争終る。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
		警防団令施行。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）
		太平洋戦争勃発。戦争によって三社大祭が中止となる。	法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御する。（八戸三社大祭の起源。）



資料の提供者

参考文献

八戸市消防団史

(八戸市発行)

卷之三

三
更
比

机えんぶり読本

正部家 種康

100

卷之三

三

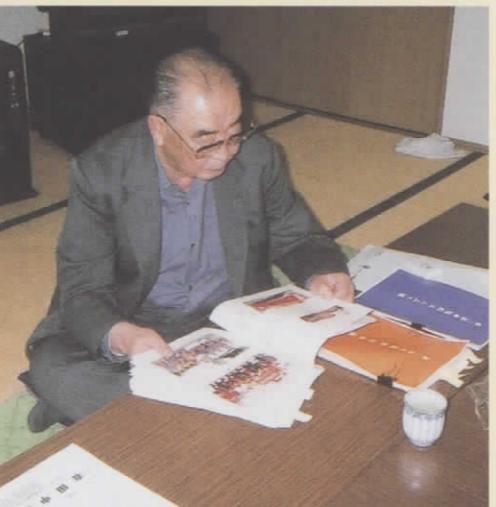


(石山 和孝 記)

このたびは、ご縁があつて編集に協力させていただきました。編集作業やいろいろな機会で、塩町の皆様には、とても良くしていただきました。心から感謝申し上げます。

昨年、取材の意味もあり、塩町のお祭りに参加させていただきました。山車を運行している中での声掛け、周囲への気配り、観客への見せ場など、人と人とのふれあいの中に厳しさや思いやりといった、真の心の付き合いを見たように思いました。

塩町のこれからを担う方達が、これまでの和合組の歩みを知り、そのすばらしい伝統と賑わい、人と人との繋がりを受け継いでくださることを願っています。これからもよろしくお願ひします。



校正刷を見る正部家種康さん



執筆する類家章弘編集長と
監督する笠原竹次郎世話役

すに各行事に参加している人も少くないはずです。私自身もその人でした。この本を読むことで、今一度塩町の歴史を紐解き、過去を知った上で、これから先を生きる我々にとて塩町がどんな町であるべきか考えることが出来ると信じています。少なくとも私は本の編集に携わり、塩町と共にこれからを生きようと思いました。変わりゆく時代の流れの中で、いつまでも変わらず、守っていくべきものが塩町にはあるのだと思いました。そう思えるようになつたのは本を作つたからだと思います。

最後に編集委員の皆様には初めから終わりまで頼りつきりで申し訳ありませんでした。こんな私ですが、最後まで見捨てず、お付き合い下さいまして深く御礼申し上げます。緒に編集に携われたことを誇りに思います。そして長い製作期間、お疲れ様でした。



正部家種唐さんを用ひて（梅町市所にて）

後左 石山和孝 後右 中村雄一
前左 類家有二 前右 類家章弘

この本の制作について、わたしの見た限りの事実を記しておきたい。

まず事実上の発起人、こういう本を作りたいと言い出したのは類家章弘であった。わたしの姪の結婚式で、かれと話をしているたら突然そんな言い始め、類家隆好にそんな話があるよと言つたら、「あいつなら考えそうしたことだ」と笑っていた。

最後の年表は、石山和孝が担当作成した。大切に残されて来た資料や写真にしても、それらを集めてこのような本を作る作業にしても、そこにあるのは塩町和合組への愛情である。今回これ程内容充実した物が、年半で出来たということに、その愛情の深さと強さを感じている。

(類家
有二
記)

り調査による加筆がある

類家有一が執筆した。



和合組の歴史の整理を思いたら、早や2年の歳月が経過し、今ようやく発刊の運びとなりました。

先輩方からは「昔は、…だった」と言う事を聞いていましたが、先輩達も高齢になり「今やらなければ、歴史が途絶える」という状況となり、急ぐ必要性を強く感じました。

私の情報収集が思うように進まず、過去の写真や資料不足のため、和合組の史実を充分に反映できず、課題を残しました。しかし、後輩達がこの記録を役立て未来につないでくれれば有り難いと思います。

結びに、公私ともお忙しい中、快く執筆をお引き受けいただいた正部家種家様に厚くお礼申し上げます。また、本誌の編集につきましては、多くの皆様から資料の提供ながらご協力をいただきました。心から感謝申し上げ編集後記とします。

(編集責任者　類家　章弘　記)



塩町三百年 和合組百三十年

塩町和合組

発行日／2007年7月1日

編集／八戸市消防団第三分団三班

塩町山車組

塩町えんぶり組

発行／塩町和合組

印刷／有限会社 田中印刷